

宮古市埋蔵文化財調査報告書22
Archaeological Researches in Miyako

狐 崎 遺 跡

— 平成元年度発掘調査報告書 —

1990. 3

岩手県宮古市教育委員会

The Board of Education Miyako, Iwate Pre.

序 文

宮古市には、現在、400箇所にもおよぶ埋蔵文化財包蔵地が確認されております。それらは、遙か数千年前の縄文時代の遺跡をはじめとし、永きにわたりこの地で営まれてきた人々のくらしの証しであり、現代を生きる私たちが、様々な時代の様子を知る上でたいへん貴重な手がかりとなるものであります。そして、現在まで残されたこのような文化遺産をさらに後世の人々に伝えることは、私たちの責務であると考えます。

しかし、現代社会の生活は、多種多様な開発を伴うものとなり、それにより消滅する埋蔵文化財の数は増加の傾向にあります。開発と文化財保護の調和を保つことは、今日の大きな課題のひとつとなっています。

このような状況のもと、宮古市教育委員会では、開発により消滅することとなった遺跡の記録保存を目的に発掘調査を行ってまいりました。

本書は、宅地造成事業により消滅する狐崎遺跡の調査結果をまとめたものでありますが、調査により、奈良時代を中心とする多くの貴重な資料が得られたことは大きな成果でありました。本書が埋蔵文化財の保護と郷土文化の理解のために、多くの方々に活用されることを願うものであります。

最後に、調査の実施にあたり、ご協力をいただきました関係各位に厚くお礼申し上げ序文といたします。

平成2年 3月

宮古市教育委員会

教育長 佐藤 勇 逸

例

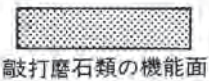
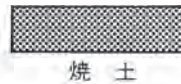
言

1. 本書は、平成元年度に実施した狐崎遺跡第2次、第3次発掘調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査の主体は、宮古市教育委員会（教育長 保坂純三、佐藤勇逸）で、発掘調査及び本書の執筆、編集は、盛合が担当し高橋、鎌田がこれを補佐した。
3. 調査座標は、平面直角座標第X系を座標変換して使用したが、調査用の局地的な座標系であることを明示するためRを冠して表示した。

座標軸方向——— 第X系に準じる

調査座標原点——— $X - (39,300,000)$ $Y + (95,000,000)$

4. 高さは、標高値をそのまま使用した。
5. 遺構・遺物の表現については、下記のとおりとした。



6. 土層観察に際しては、『新版標準土色帖』（1967 小山正忠・竹原秀雄）を参考とした。
7. 発掘調査及び遺物の整理、報告書の作成にあたり、次の方々からご教示、ご指導を頂いた。記して謝意を申し上げます。（敬称略）

高橋 信雄（岩手県教育委員会文化課）	熊谷 常正（岩手県立博物館）
佐々木 勝（ ” ）	佐々木清文（ ” ）
小野田哲憲（岩手県埋蔵文化財センター）	佐藤 嘉則（ ” ）
斎藤 邦雄（ ” ）	武田 将男（宮古市教育委員会）
光井 文行（ ” ）	
玉川 英喜（ ” ）	
高橋 義介（ ” ）	

8. 出土した遺物、実測図、写真など調査にかかわる資料は、一括して宮古市教育委員会に保管している。

目 次

序 文	
例 言	
目 次	
I 調 査 経 過	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査要旨	1
3. 調査体制	2
II 遺跡の位置と環境	2
1. 宮古市の地形概観	2
2. 「長根・泉町・鴨崎遺跡群」と狐崎遺跡	4
III 調 査 内 容	7
1. 遺構の検出状況	7
2. 検出された遺構と遺物	13
IV 調査のまとめ	48
1. 縄文時代の遺構・遺物について	48
2. 弥生時代の遺構・遺物について	48
3. 奈良時代の遺構・遺物について	49

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	2
第2図	地形分類図	3
第3図	長根・泉町・鴨崎遺跡群遺跡分布図	5
第4図	調査区位置図	8
第5図	調査区全体図	9
第6図	調査区土層断面図(1)	11
第7図	調査区土層断面図(2)	12
第8図	第1号竪穴住居跡	14
第9図	第1号竪穴住居跡断面図	15
第10図	第1号竪穴住居跡カマド	16
第11図	第1号竪穴住居跡出土遺物	17
第12図	第2号竪穴住居跡	19
第13図	第2号竪穴住居跡断面図	20
第14図	第2号竪穴住居跡カマド	21
第15図	第2号竪穴住居跡出土遺物	22
第16図	第3号竪穴住居跡	24
第17図	第3号竪穴住居跡断面図	25
第18図	第3号竪穴住居跡カマド	26
第19図	第3号竪穴住居跡出土遺物	27
第20図	第4号竪穴住居跡	29
第21図	第4号竪穴住居跡カマド	30
第22図	第4号竪穴住居跡出土遺物	32
第23図	第5号竪穴住居跡、第6号竪穴住居跡、第3号土壇跡、第5号土壇跡	34
第24図	第5号竪穴住居跡、第6号竪穴住居跡、第3号土壇跡、第5号土壇跡断面図	35
第25図	第5号竪穴住居跡カマド、第4号土壇跡	36
第26図	第5号竪穴住居跡出土遺物	38
第27図	第5号竪穴住居跡、第6号竪穴住居跡出土遺物(1)	39
第28図	第5号竪穴住居跡、第6号竪穴住居跡出土遺物(2)	40
第29図	第6号～第11号土壇跡、焼土遺構	41
第30図	第6号～第11号土壇跡、焼土遺構断面図	42
第31図	土壇跡出土遺物(1)	43
第32図	土壇跡出土遺物(2)	44
第33図	第1号土壇跡、第2号土壇跡、溝遺構	46
第34図	遺構外出土遺物(1)	47
第35図	遺構外出土遺物(2)	48

写真図版目次

第 1 図版	第 3 号竖穴住居跡遺物出土状況、狐崎遺跡出土土器
第 2 図版	調査区景観（調査前）、調査区全景（調査終了後）
第 3 図版	第 1 号竖穴住居跡、第 1 号竖穴住居跡堆積状況
第 4 図版	第 1 号竖穴住居跡カマド、第 2 号竖穴住居跡
第 5 図版	第 2 号竖穴住居跡堆積状況、第 2 号竖穴住居跡カマド
第 6 図版	第 3 号竖穴住居跡、第 3 号竖穴住居跡堆積状況
第 7 図版	第 3 号竖穴住居跡カマド、第 4 号竖穴住居跡
第 8 図版	第 4 号竖穴住居跡堆積状況、第 4 号竖穴住居跡カマド
第 9 図版	第 5 号、第 6 号竖穴住居跡、第 5 号、第 6 号竖穴住居跡堆積状況
第 10 図版	第 5 号竖穴住居跡遺物出土状況、第 6 号～第 9 号土壇跡
第 11 図版	第 9 号土壇跡遺物出土状況、溝遺構
第 12 図版	出土遺物 (1)
第 13 図版	出土遺物 (2)
第 14 図版	出土遺物 (3)

付 表 目 次

第 1 表	各住居跡出土土器個体数.....50
-------	--------------------

I 調査経過

1. 調査に至る経過

狐崎遺跡は、宮古市山口第6地割狐崎地内に所在し、昭和57年度から昭和60年度にかけて宮古市教育委員会で実施した市内の遺跡分布調査事業により、宮古市遺跡コードL G 33-0207として登録されている周知の遺跡である。

本遺跡は「長根、泉町、鴨崎遺跡群」と称される一群に属する遺跡のひとつである。この遺跡群は市街地にまさに隣接する丘陵地上に位置しており、近年、増加の傾向をみる宅地開発による削平は著しく、宮古市内において、最も開発の進む地区のひとつとなっている。

このような状況のもと、遺跡の保護、保存が回避となる件数が増加し、開発側の理解と協力を得て緊急発掘調査が実施されてきた。当該遺跡群内における過去の調査例としては、青猿Ⅰ遺跡、青猿Ⅱ遺跡、泉町狐崎Ⅱ遺跡、長根Ⅰ遺跡などの調査があり、本遺跡もその一部の試掘調査が昭和60年度に宮古市教育委員会により実施されている。(狐崎遺跡第1次調査)

今回の調査は、本遺跡内における個人住宅建築(昭和63年4月、佐藤裕之により申請)並びに宅地造成(昭和63年4月 小柳整宏により申請)によるものであり、両申請者と宮古市教育委員会との協議の結果、遺跡の記録保存を前提とした緊急発掘調査を実施するに至った。

2. 調査要旨

○第2次調査

調査地	宮古市山口三丁目37番・41番・58番1
調査原因	個人住宅建築(佐藤裕之)
調査期間	平成元年4月25日～平成元年6月8日
調査対象面積	1,328㎡
調査面積	約300㎡
検出遺構	奈良時代竪穴住居跡2棟
出土遺物	土師器・縄文土器・石器ほか

○第3次調査

調査地	宮古市山口三丁目37番・58番1
調査原因	宅地造成(小柳整宏)
調査期間	平成元年6月6日～平成元年8月4日
調査対象面積	2,835㎡
調査面積	約1,000㎡
検出遺構	奈良時代竪穴住居跡3棟・弥生時代竪穴住居跡1棟・縄文時代を中心とする土壇跡11基・時代不明溝跡1条
出土遺物	土師器(奈良時代)・弥生土器・縄文土器・鉄器・石器ほか

3. 調査体制

発掘調査の体制は次のとおりである。

調査総括	招待 保典	宮古市教育委員会社会教育課長
	小本 哲	〃 社会教育係長
調査員	高橋憲太郎	〃 社会教育課主事
	鎌田 祐二	〃 〃
	盛合 義信	〃 〃

調査の実施にあたり、次の各位から多大の御協力をいただいた。(敬称略)

〈地権者〉	佐藤裕之	小柳整宏	佐香英夫			
〈発掘調査〉	村岡憲一	伊藤晴男	佐々木茂	古舘友三	吉田 昭	木村 博
	佐伯裕則	刈屋昭三	田崎省吾	北村忠治	今津東一	菊地清八
	神林信吉	中村福右エ門	山内専太郎	大倉重雄	伊東 弘	
	菅原テルミ	藤谷晶子				
〈整理作業〉	伊藤晴男	味噌作宣子	竹原昌江	成田寿美江		

II 遺跡の位置と環境

1. 宮古市の地形概観

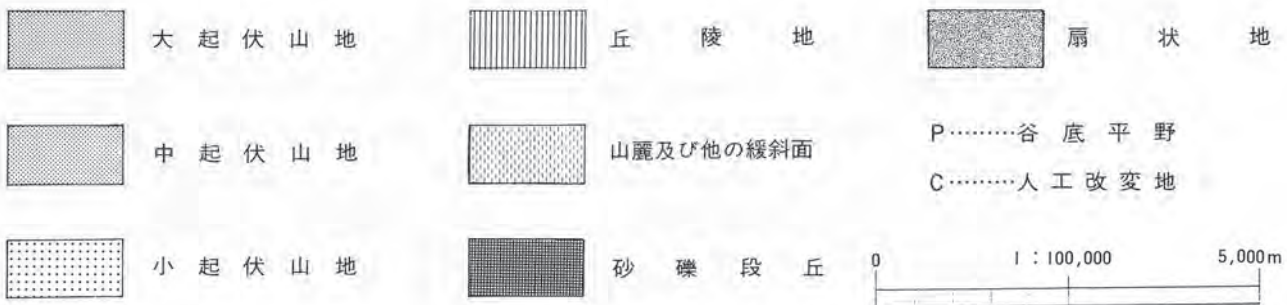
宮古市は岩手県沿岸部のほぼ中央に位置し、東に太平洋を望み、西に海岸部にまでせまる北上山地を仰ぐ。海岸線は宮古市を境にその景観を大きく異にし、北は海岸段丘が続く隆起性海岸で、南は沈降性のリアス式海岸を形成する。

市域は面積338.38km²を有し、その大部分は中小起伏の山地帯が占める。北西部、南西部の山地は標高1,000mを越え大起伏山地となる。北上山地から宮古湾に向い東流する閉伊川、北流する津軽石川、およびその支流により開析されてできた谷底平野や河岸段丘、両河川の河口付近を中心とした沖積平野がわずかな平地である。

西部の大起伏山地は太平洋へ向けて次第に標高を下げ、中小起伏山地となり、さらに標高100m前後の丘陵地へと続く。海岸線沿いには北部に小本丘陵、重茂半



第1図 遺跡位置図



第2図 地形分類図

島に鮭ヶ崎丘陵、河川沿いには閉伊川河岸に千徳丘陵、八木沢川河岸に八木沢丘陵、津軽石川河岸に豊間根丘陵が形成されている。

2. 「長根・泉町・鴨崎遺跡群」と狐崎遺跡

宮古市内には縄文時代から近世に至るまでの数多くの遺跡が各所に存在するが、その分布状況をみると、前述の丘陵地上においてその分布頻度は比較的高く、いくつかの遺跡のまとまりがみられ、それらは遺跡群としてとらえることができる。小本丘陵上の崎山遺跡群、千徳丘陵上の千徳城遺跡群などである。

狐崎遺跡は千徳丘陵上の長根・泉町・鴨崎遺跡群に属する遺跡のひとつである。千徳丘陵は北の黒森山地、南の花輪山地が閉伊川とその支流である長沢川、近内川、山口川などにより開析されてできた丘陵であり、長沢川が閉伊川に合流する付近から閉伊川河口までの間、おもに閉伊川北岸の沖積平野を囲むように位置する。このうち、閉伊川河口から東に3km、近内川と山口川に狭まれ、東に向けて半島状に突出した形を呈する丘陵末端部に長根・泉町・鴨崎遺跡群は位置する。北側から東側にかけては山口川の氾濫低地、南側は閉伊川の旧河道域と近内川の氾濫低地にそれぞれ面し、3方を河川に囲まれた立地であるが、現在では氾濫低地に広がった市街地および住宅地に囲まれる。標高は最高で約80mを計る。斜面は南側で急傾斜であるが、北側は比較的緩やかな傾斜を有する。このような緩斜面部や尾根筋上に多くの遺跡が分布しており、現在、18ヵ所の遺跡の存在が確認されている。

近年、この地区では宅地造成による開発が進み、特に緩斜面を呈する北側および南西側において顕著である。このような開発に伴いこれまでに本遺跡の第1次調査を含む5遺跡の緊急発掘調査が実施されている。それらの調査の概略は次のとおりである。

- ・泉町狐崎II遺跡（昭和56年度・昭和63年度 宮古市教育委員会により調査）
検出遺構……縄文時代竪穴住居跡、奈良時代竪穴住居跡ほか
- ・青猿II遺跡（昭和59年度 宮古市教育委員会により調査）
検出遺構……平安時代竪穴住居跡ほか
- ・狐崎遺跡（昭和60年度 宮古市教育委員会により調査）
検出遺構なし 縄文時代の遺物出土
- ・青猿I遺跡（昭和62年度 宮古市教育委員会により調査）
検出遺構……平安時代竪穴住居跡、鉄関連遺構ほか
- ・長根I遺跡（昭和63年度 岩手県埋蔵文化財センターにより調査）
検出遺構……奈良時代古墳群ほか

狐崎遺跡は長根・泉町・鴨崎遺跡群の北端部に位置し、北東方向に細長く突出した形で残る小丘陵上に存在する。長さ約100m、幅約50mを計るが丘陵の原形は先端部がさらに数十メートルのびていたものであり、第1次調査の後、削平されている。標高は約30～40mで、山口川の氾濫低地を北に見下し、低地からの比高差は20～30mである。丘陵上は尾根を境に東側に緩斜面部を有し、西側は比較的急斜面となる。丘陵の東側は谷地であり、西側も同様であったと思われるが、現在では大規模に宅地化されている。



第3図 長根・泉町・鴨崎遺跡群遺跡分布図

III 調査内容

1. 遺構の検出状況

第2次調査と第3次調査は継続した調査であるため、調査内容は両調査を一括して記す。

調査対象区域は尾根を中心とした細長い丘陵地であるため、調査区は尾根頂部から東側の比較的緩斜面を呈する部分を中心とし、丘陵の先端部から基部まで尾根筋上に長形に設定した。その長さは約90m、幅は約9mである。急傾斜を呈す西側の斜面については、遺構の存在が予想されないものとし、一部にトレンチを設けるにとどめた。調査区内は全面的に表土を除去し、調査を実施した。

基本層序はⅠ層～Ⅴ層の5層に大別される。

Ⅰ層は表土であり、尾根頂部から西側の斜面にかけて部分的に堆積するⅠa層と調査区全体を覆うⅠb層に分けられる。Ⅰa層は褐色土を基本土とし、混入土はみられない。Ⅰb層は暗褐色土を基本土とし、真砂土粒と炭化物粒を含み、やや固い層である。

調査区の主部となる東側の斜面では、Ⅰb層の直下に遺構検出面であるⅤ層（地山層）がみられるが、西側斜面のトレンチおよび調査区南西部ではⅡ層～Ⅳ層の堆積が確認された。

Ⅱ層は粘性のあるにぶい黄橙色土を基本土とし、暗褐色土を含む。

Ⅲ層は粘性のあるやや明るい黄褐色土を基本土とし、暗褐色土をわずかに含む。Ⅱ層よりやや固くしまりがある。

Ⅳ層は明るい黄褐色土を基本土とし、黄橙色土を含み、固くしまる。

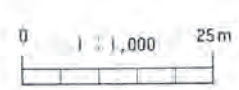
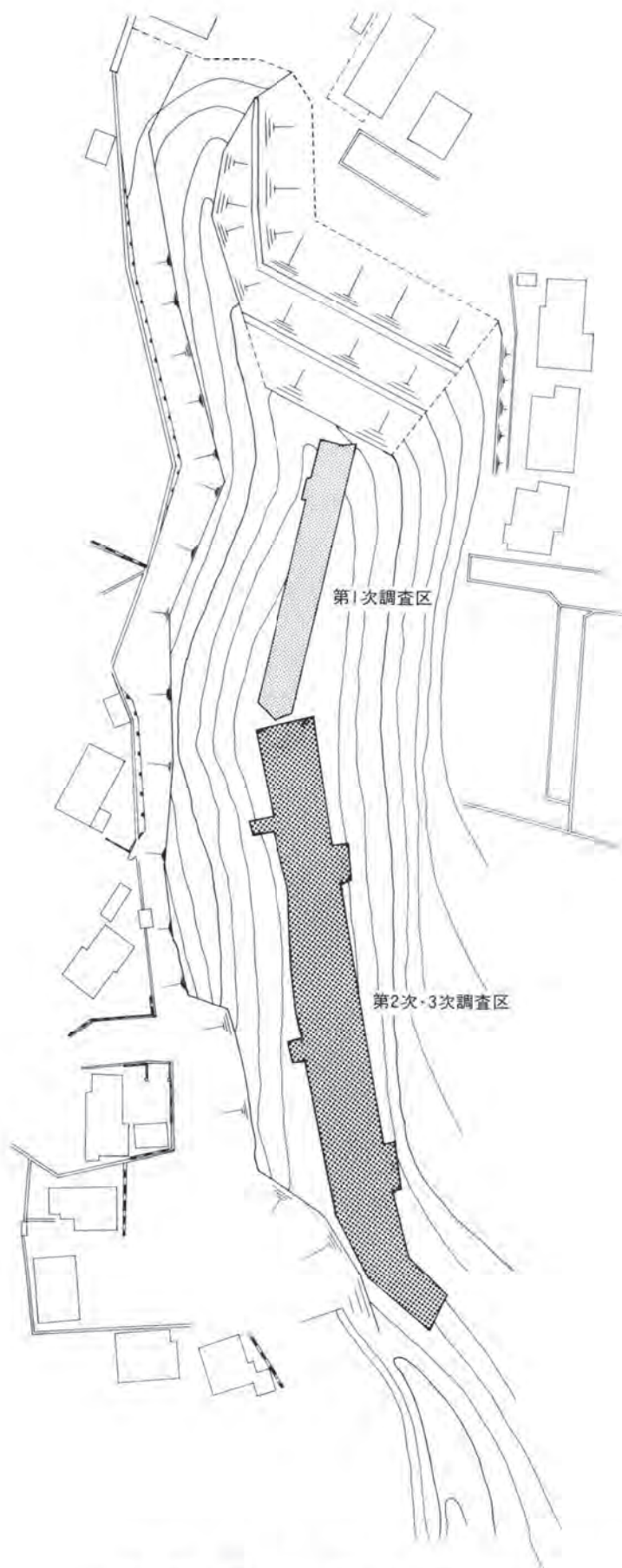
Ⅴ層は真砂土の地山層である。

検出された遺構は、竪穴住居跡6棟、土壇跡11基、溝跡1条、焼土遺構1基である。

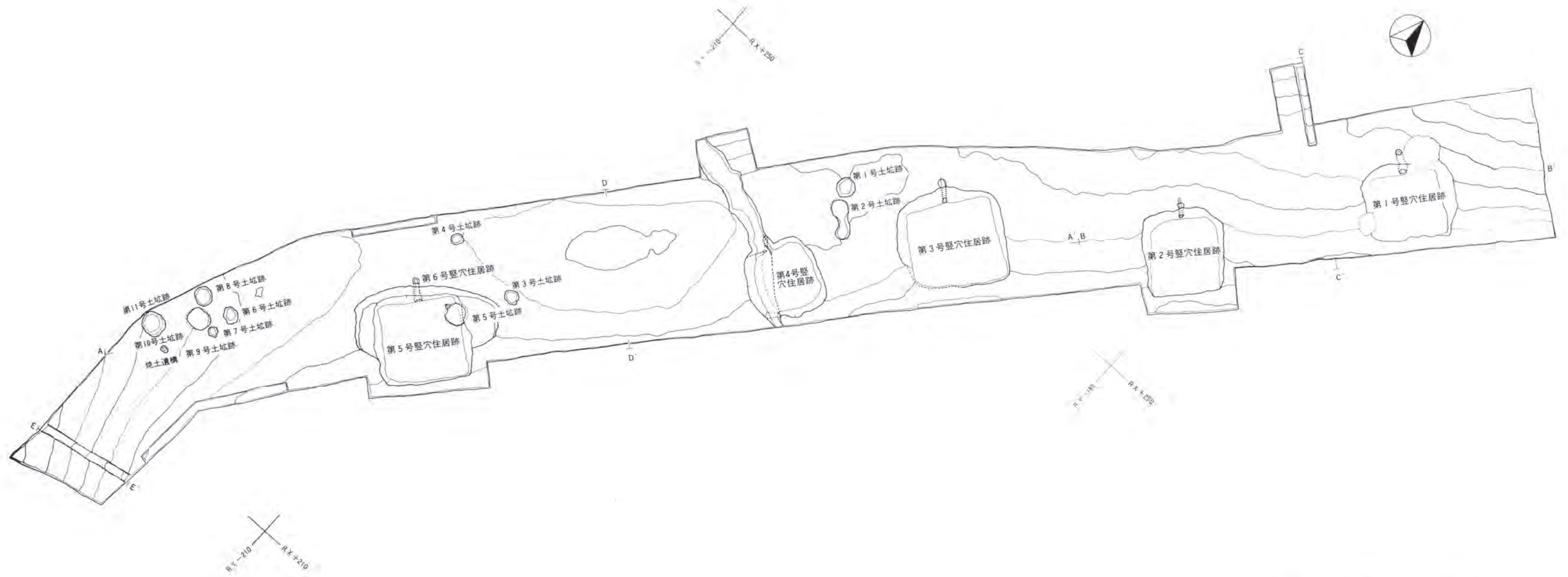
竪穴住居跡は奈良時代のもものが5棟、弥生時代のもものが1棟である。土壇跡は縄文時代のもものが中心であるが、一部時期不明のものもある。溝跡は奈良時代の竪穴住居跡を切ることにより、同時代以降のものと思われる。焼土遺構は時期不明である。

これらの遺構はⅤ層上面で検出された。奈良時代の竪穴住居跡は北西側にカマドを配し、主軸方向はほぼ同一で尾根筋と直交する南東方向である。土壇跡は調査区の南半に多く、特にその規模が比較的大きなものは南西端部に集中する。焼土遺構もその付近で確認されている。溝跡は調査区の中央部を横断する形で確認された。

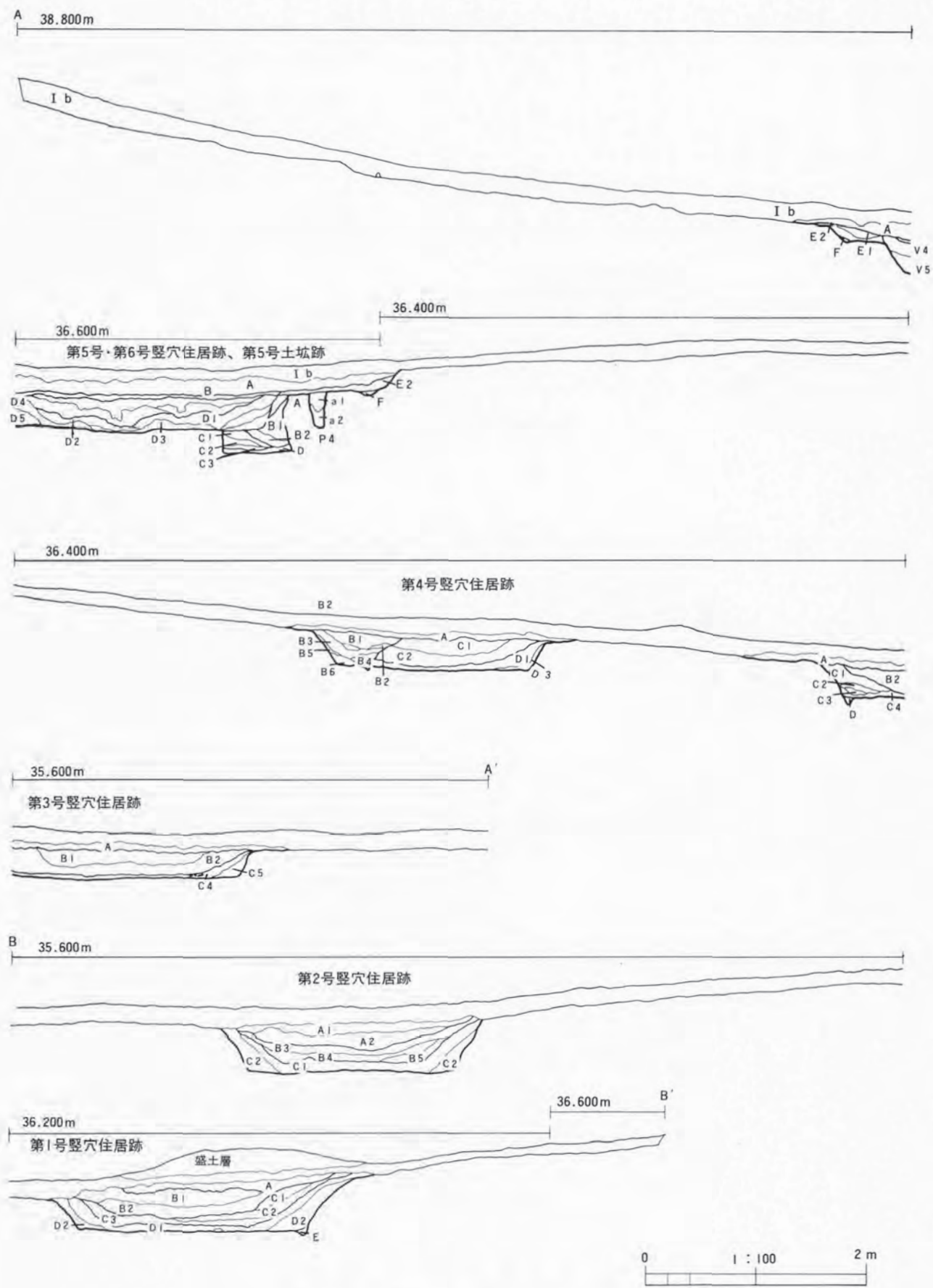
遺構の重複は数カ所でみられる。弥生時代の竪穴住居跡は奈良時代の竪穴住居跡のひとつに切られる。（第5号竪穴住居跡・第6号竪穴住居跡）溝跡は奈良時代の竪穴住居跡を切る。（第4号竪穴住居跡）土壇跡は第5号土壇跡が、第5号竪穴住居跡および第6号竪穴住居に切られている。



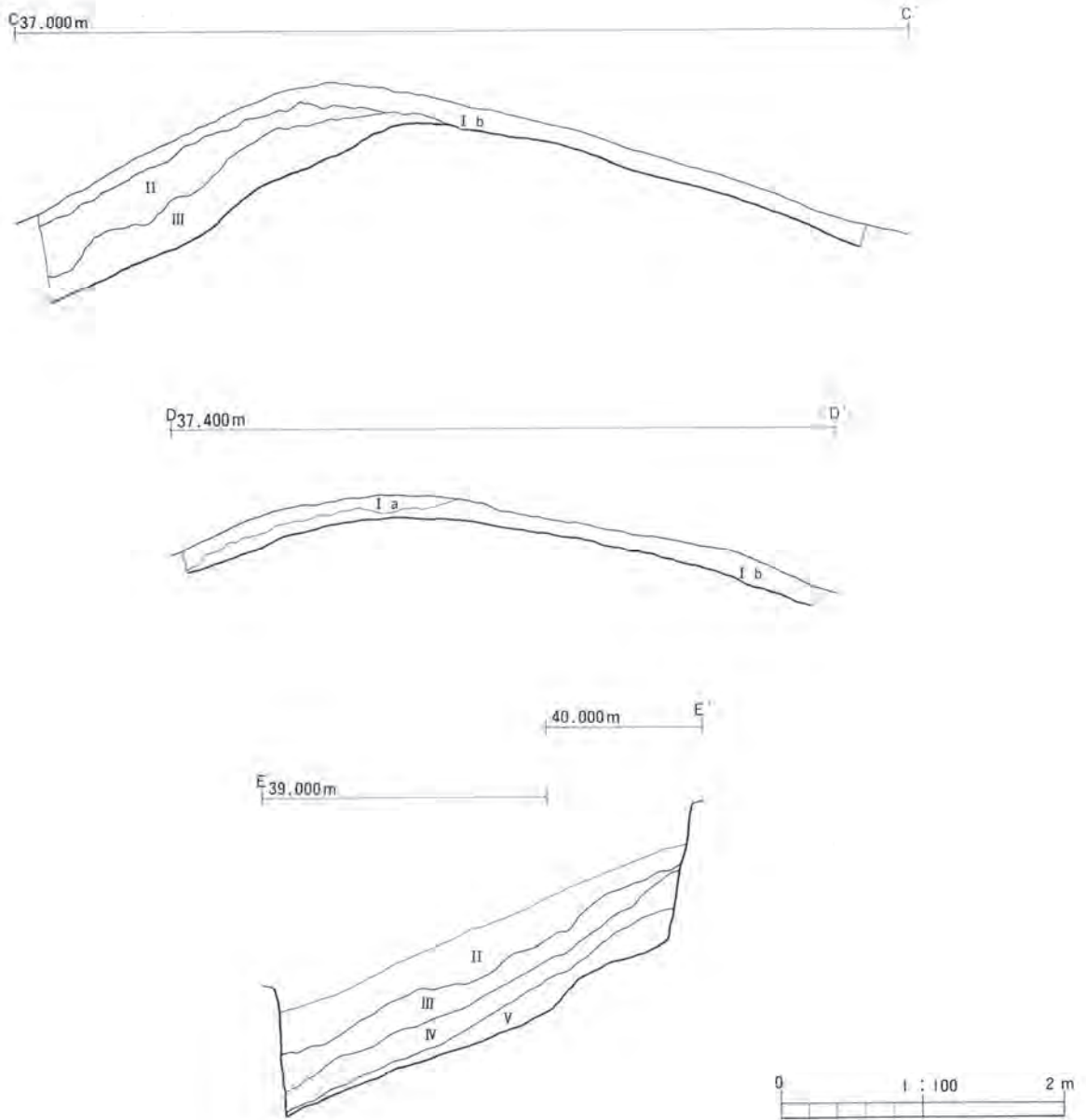
第4図 調査区位置図



第5图 调查区全体图



第6図 調査区土層断面図 (I)



第7図 調査区土層断面図(2)

2. 検出された遺構と遺物

第1号竪穴住居跡（第8～11図）

調査区北端に位置する。北西壁の一部と南西壁の一部をカクランされる。

平面形は隅丸方形を呈し、規模は北西～南東方向で4.3m、北東～南西方向で5.3mを計る。

平面形

壁は北東壁、南西壁はやや緩やかに外傾するが、斜面上部の北西壁は直に立ち上がり上部で外傾する。斜面下部の南西壁は削平され消滅している。壁高は北西壁で1.0mを計る。

埋土はA層、B層、C層、D層に大別される。

埋土

A層は暗褐色土を基本土とし、黒褐色土塊をわずかに含む。小角礫を多く含み、炭化物粒をわずかに含む。あまりしまりがいい。

B層は黒色～黒褐色のシルト質土を基本土とし、にぶい黄褐色土をわずかに含む。炭化物粒を含む。B2層は混入土の割合が多く、C層へやや漸移的に推移している。

C層はにぶい黄褐色のシルト質土を基本土とし、黒褐色土をわずかに含む。炭化物粒を比較的多く含み、特にC2層に多い。

D層はにぶい黄橙色～灰白色土で、地山層（真砂土）に近い層である。黄褐色土をわずかに含む。炭化物粒と多量の真砂土を含む。D1層はD2層に比し、色調がやや暗い。

床面は平坦であり固くない。南東側の約3分の2に貼床がみられる。東側でやや厚い。

貼床

周溝は各壁の下にみられるが、南東壁の南半、南西壁の南半では確認されなかった。幅は南側、西側で5～15cm、北側、東側で18～35cmを計り、深さは10cm程度である。埋土のE層はにぶい黄橙色土でD2層に類似する。カマドの北東には、床面との比高差15cm程度の地山を削り残した段状の施設がみられ、周溝はその内外に掘り込まれている。

周溝

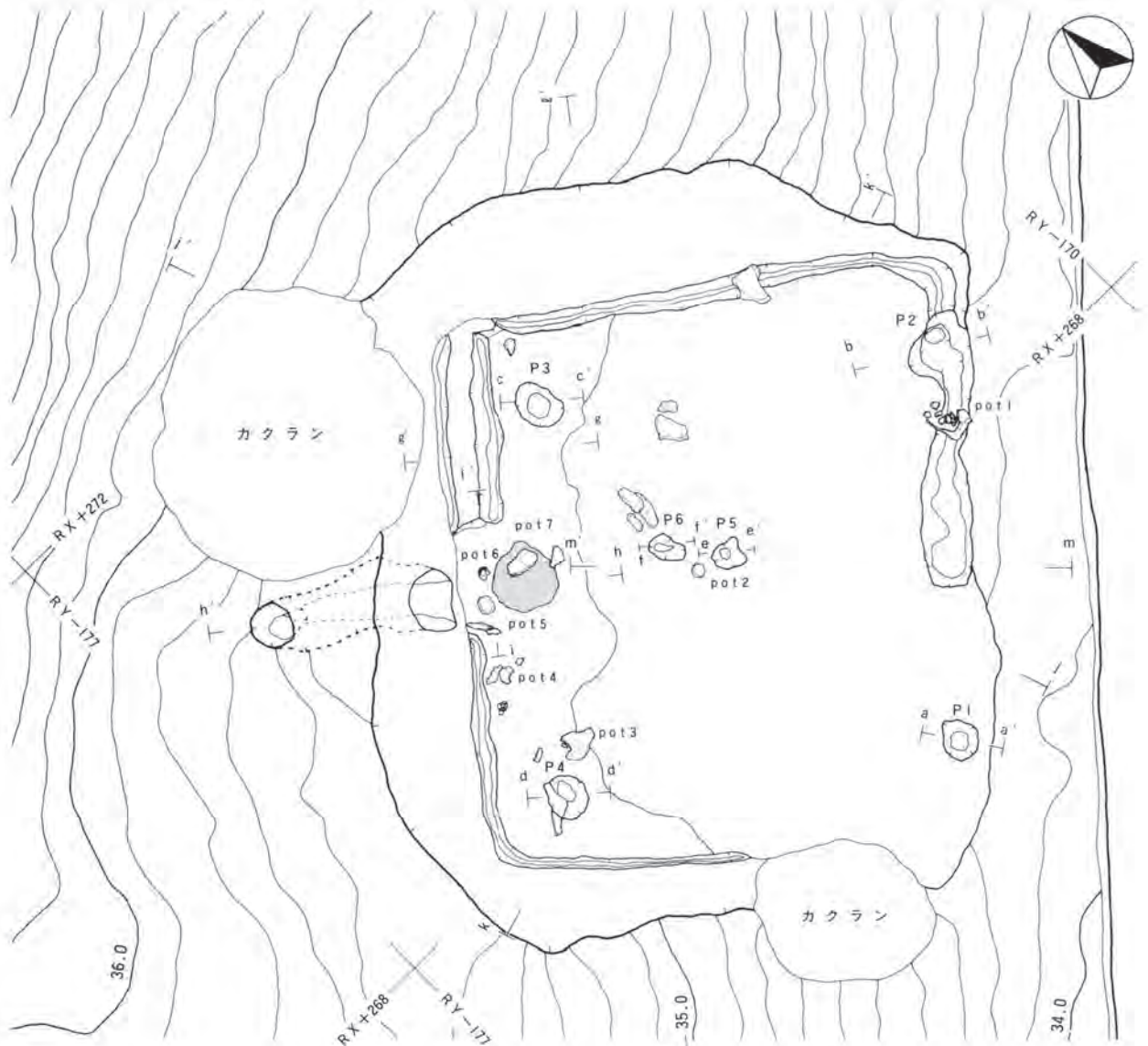
柱穴はP1～P4が柱痕跡を持ち壁からやや離れた四隅に方形に配置される。規模はP1が径32×26cm、深さ43cm、柱痕跡径11cm、P3が径38×27cm、深さ60cm、柱痕跡径12cm、P4が径32×29cm、深さ82cm、柱痕跡径12cmである。P2は周溝と重複したため、明確な平面形を確認できなかった。P5、P6は小ピットである。

段状施設

柱穴

カマドは北西壁中央に構築されている。長軸方向はW-35°-N。本体部は崩壊しているが焚口の左側に直立に埋め込まれた板状礫が残り、床面上に同様の礫が散在する。また、中央部に焼台として使用したと思われる土師器甕底部が2個並んで残る。（第11図5、6）燃焼部は床面を掘り込みK6層～K8層を詰め、K6層上面を火焼面としている。K6層は焼土層で固くしまり、層厚6cmである。K7層は黄褐色シルト質土でやわらかくしまりがいい。K8層は黄褐色砂質土でやわらかくしまりがいい。燃焼部の規模は70×58cm、深さ15cmである。煙道は削り貫きで、長さ147cm、幅45cmで、煙出口に向かい、約10°の上り勾配を有す。煙出口は径33cmの円形である。焚口から約100cmのところへ窪みを有し、そこから煙出口に向けほぼ直に立ち上がる。煙出口から窪み底面までの深さは80cmである。煙道および煙出しの埋土はK1層からK5層である。K1層はにぶい黄褐色のシルト質土で、真砂土粒、炭化物粒を含み、あまりしまりがいい。K2層はにぶい黄橙色でしまりがなく地山層の崩壊土と思われる粒、塊と炭化物粒を多量に含む。K3層は暗黄褐色シルト質土でしまりがなく、炭化物粒を含む。K4層は灰黄褐色土で炭化物粒を含み、やわらかくしまりがいい。K5層はにぶい黄橙色土で、地山層の粒、礫を含む。

カマド



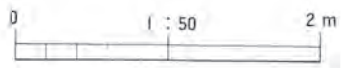
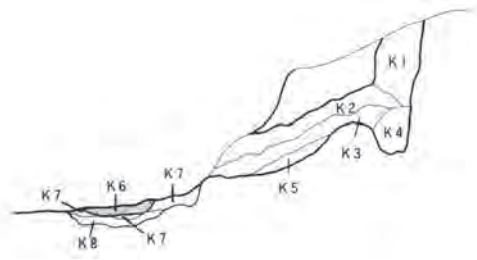
a 34.800m a' b 34.800m b' g 35.600m g' i 35.600m i'



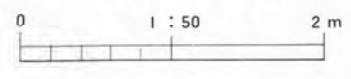
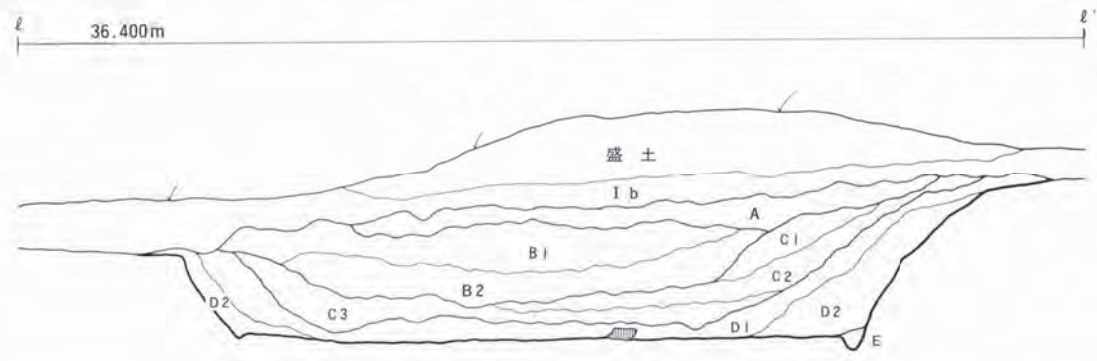
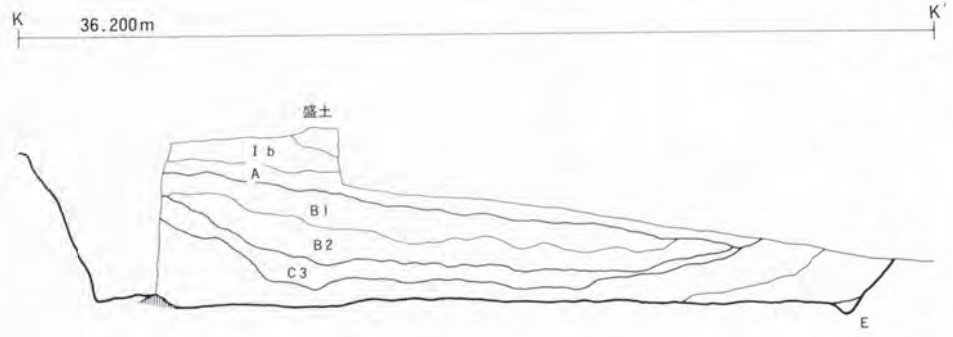
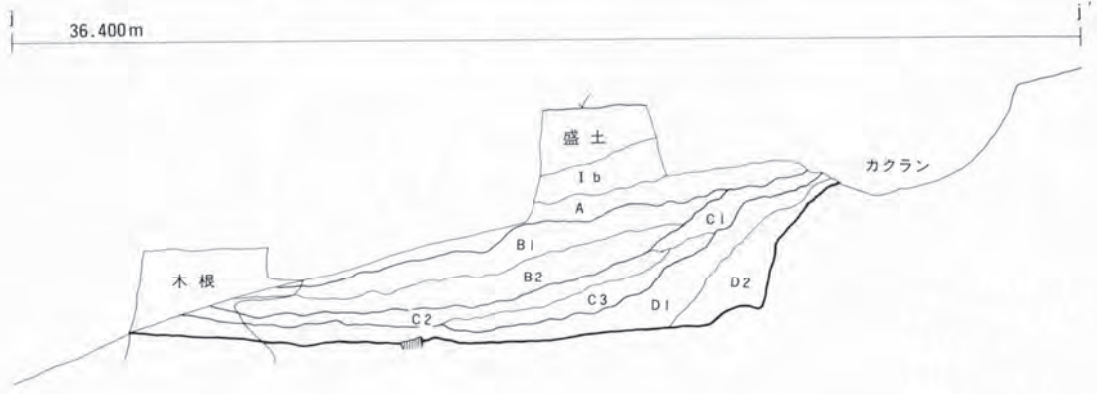
c 34.800m c' d 34.800m d' h 35.600m h'



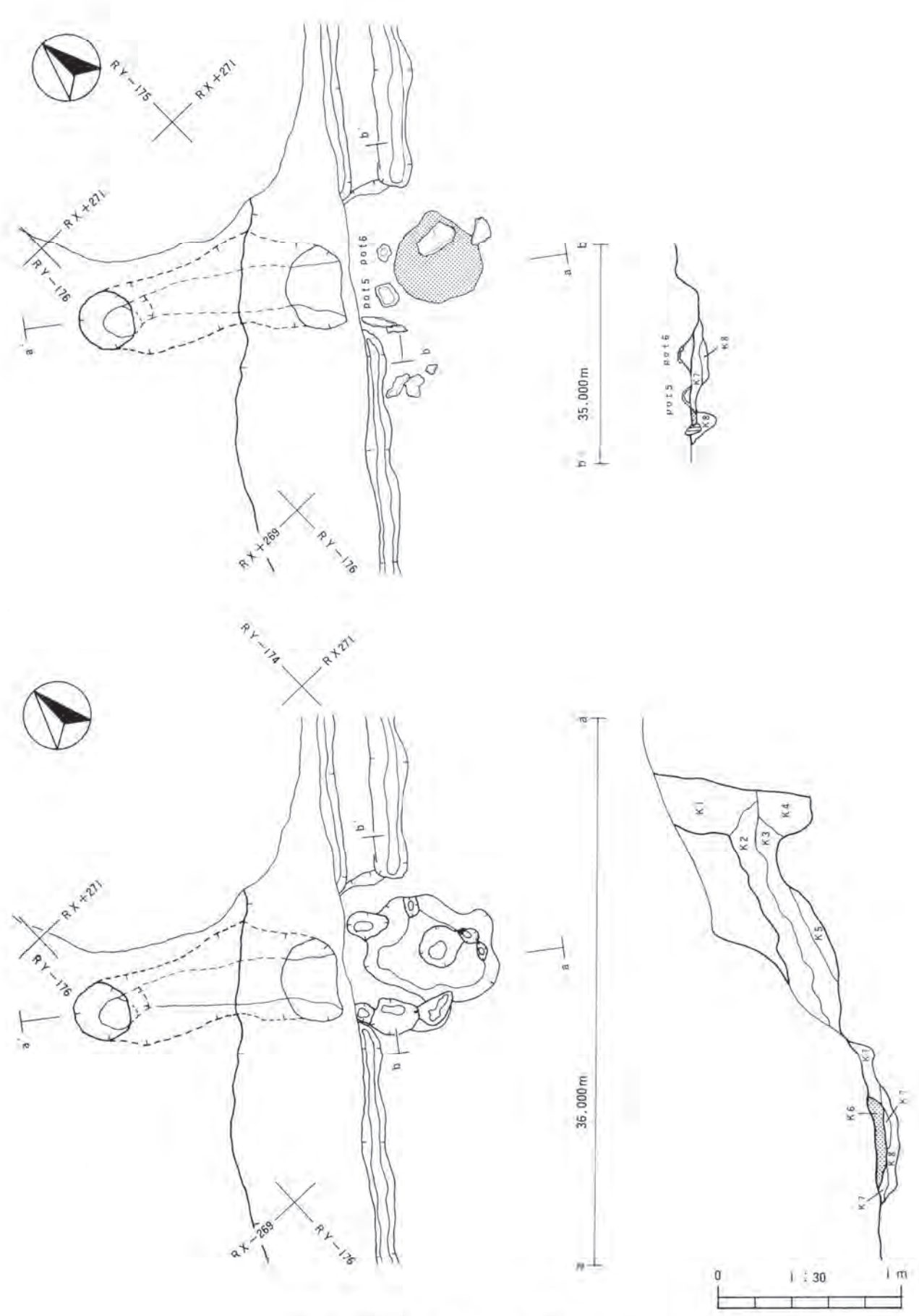
34.800m e e' 34.800m f f'



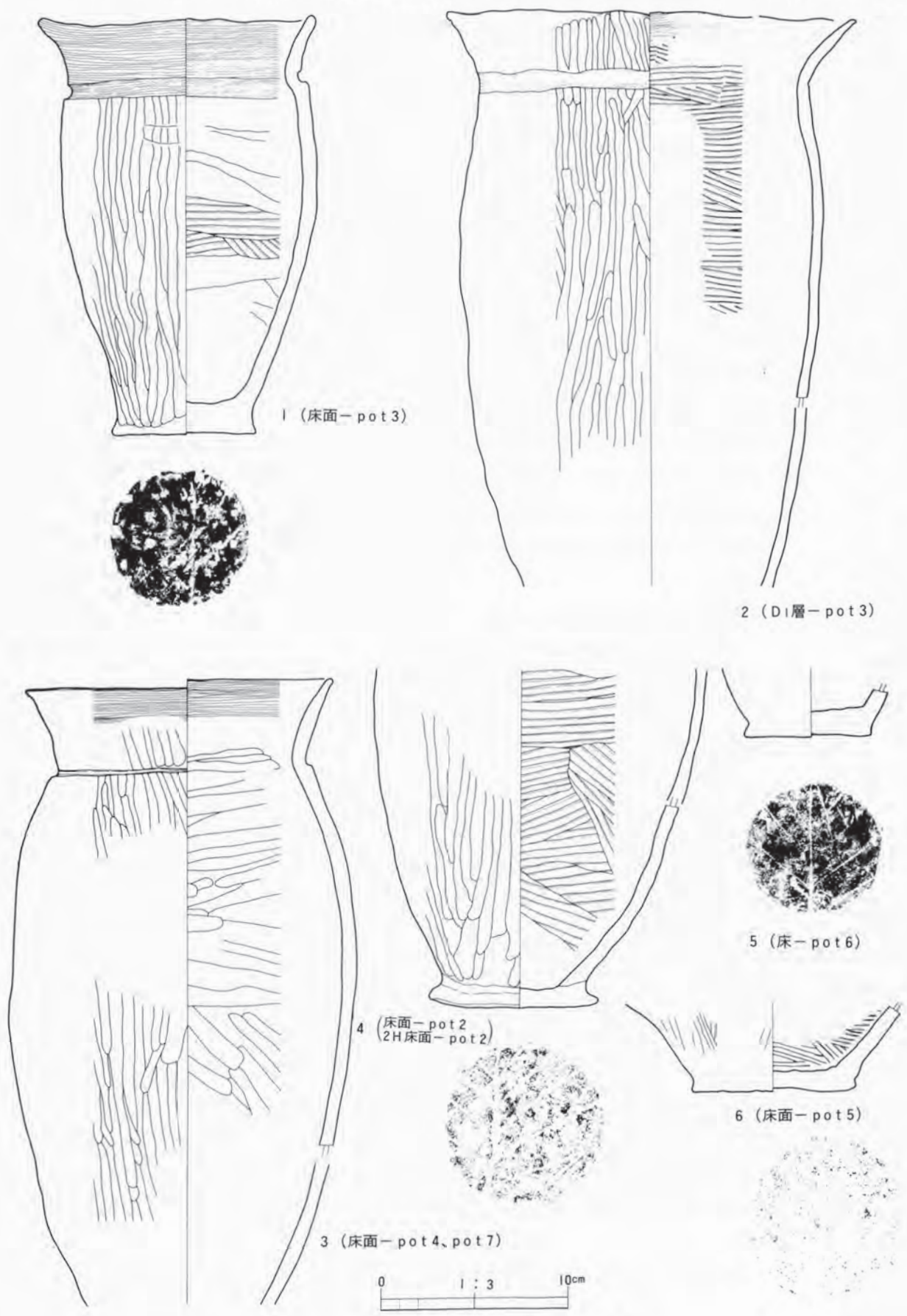
第8図 第1号 竪穴住居跡



第9図 第1号竪穴住居跡断面図



第10図 第1号竖穴住居跡カマド



第11図 第1号竖穴住居跡出土遺物

出土遺物（第11図）

1は床面出土の甕で、口縁部が最大径となる。体部はゆるやかに膨らみ、体部の最大径は上半にある。口縁部は外反し、頸部に明瞭な段を有し、幅1cm程の沈線をめぐらす。底部はわずかに張り出し、底面には木葉痕があるが磨滅している。器面調整は口縁部～頸部が内外面とも横ナデ、体部外面がミガキ、体部内面がへらナデで一部に刷毛目がみられる。D1層から出土した甕で体部下半を欠く。口縁部は外傾し、頸部に段は無く、幅1cmの浅い沈線がめぐる。最大径は口縁で、体部の最大径は上半にある。器面調整は口縁部外面がミガキで、図示した以外に部分的な刷毛目がみられる。口縁部内面は横ナデで一部刷毛目、体部外面はミガキ、頸部から体部にかけての内面が刷毛目である。3は床面出土の甕で、体部の中央に最大径をもつ。口縁部は外傾し、頸部に段を有し、幅3mmの沈線がめぐる。器面調整は口縁部外面が横ナデで、下半にミガキが入り、体部外面はミガキである。内面は口縁部が横ナデ、口縁部下半から体部にかけてが横方向のミガキである。4は甕の上半を欠くもので、床面から底部と体部の一部が出土しているが、それと接合する体部の一部が第2号竪穴住居跡床面より出土している。底部は張り出し、底面には木葉痕がある。器面調整は体部外面がミガキ、内面が刷毛目である。5、6は甕の底部で、カマドの火焼面付近より出土している。5は底部がわずかに張り出し、底面には木葉痕がある。6は底部から体部にかけての立ち上がりが比較的広がり、底部はわずかに張り出す。底面に木葉痕があるが磨滅している。器面調整は体部外面がミガキ、内面が刷毛目である。

第2号竪穴住居跡（第12～15図）

第1号竪穴住居跡の南東8.5m付近に位置する。

平面形 壁

平面形は隅丸方形を呈し、規模は北西～南東方向で4.9m、北東～南東方向で4.7mを計る。壁は床面からほぼ直に立ち上がるが、北西壁では上部でやや緩やかに外傾する。南東壁は削平され消滅している。

埋土

埋土はA層、B層、C層に大別される。

A層は黒～黒褐色のシルト質土を基本土とし、褐色土塊を含む。A1層はA2層に比して、混入土の量が多く、やや色調が明るい。

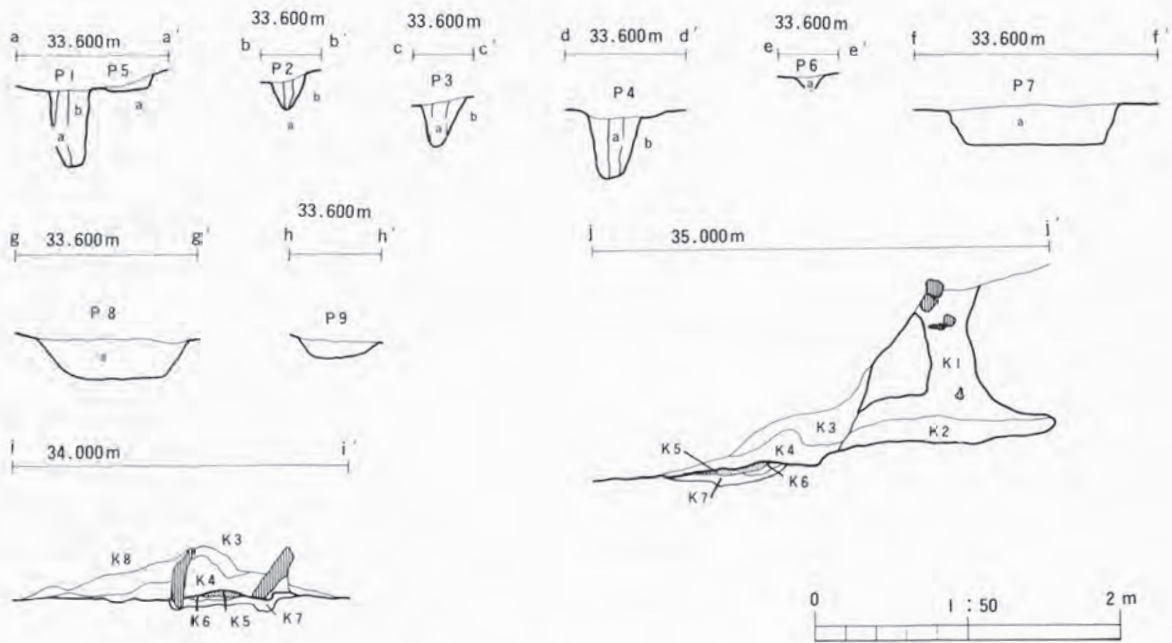
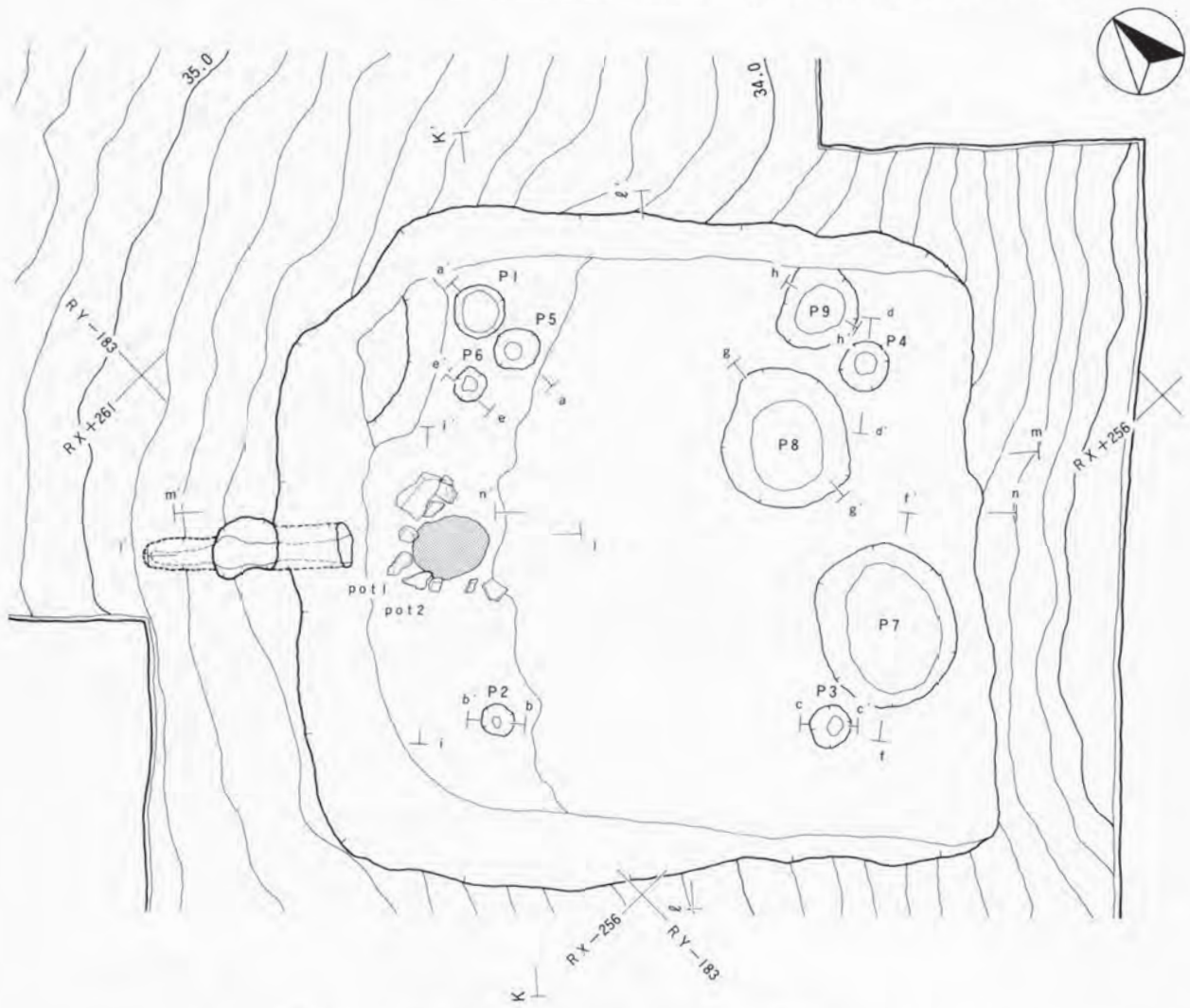
B層は黄褐色～暗褐色のシルト質土を基本土とし、全体的に少量の炭化物粒を含む。B1層は黄褐色土層で黒褐色土塊を含み、遺構中央部に部分的に堆積する層である。B2層は暗褐色土層でB層中最も暗色の層である。A2層に類似する色調であるが粒～塊状の黄褐色土を含む。B3層はにぶい黄褐色土層で暗褐色土塊をわずかに含む。B4層は暗褐色土層でにぶい黄褐色土塊をわずかに含む。やや赤味を帯びる。B5層は黄褐色土層で色調がC層にやや近い。

C層はにぶい黄橙色のシルト～砂礫質土を基本土とし、明黄褐色土塊を含む。炭化物粒を少量混入する。C1層はやややわらかくしまりがなく、C2層は地山層に近く、比較的固くしまる。

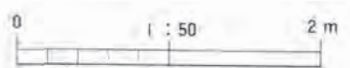
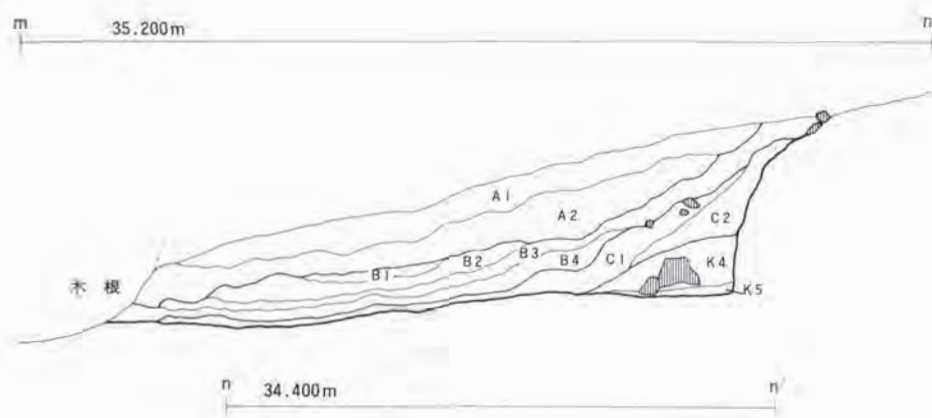
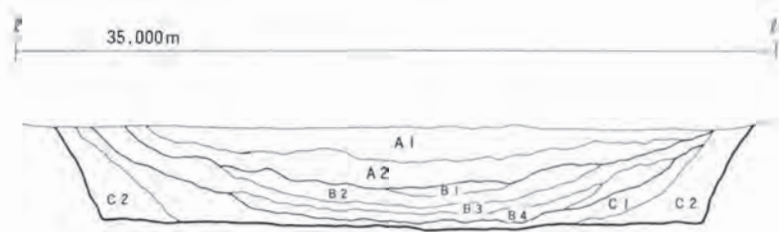
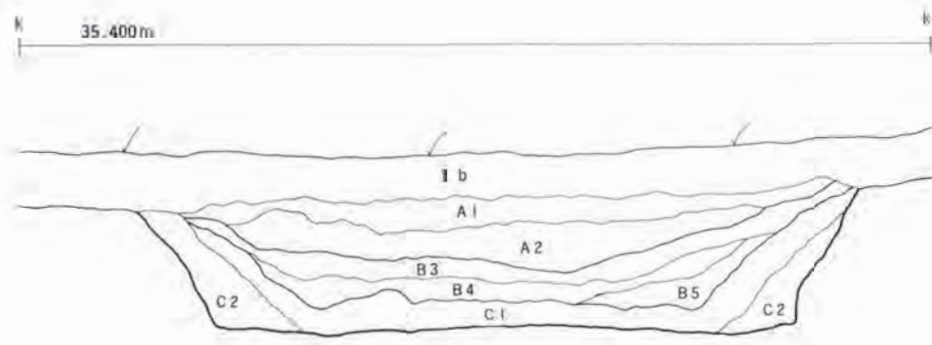
床面は平坦であり固くない。南東側の約3分の2に貼床がみられる。周溝は認められない。カマドの右横に段状施設が確認された。幅60cm、長さ120cm程で、床面からの比高差は30cmである。

柱穴

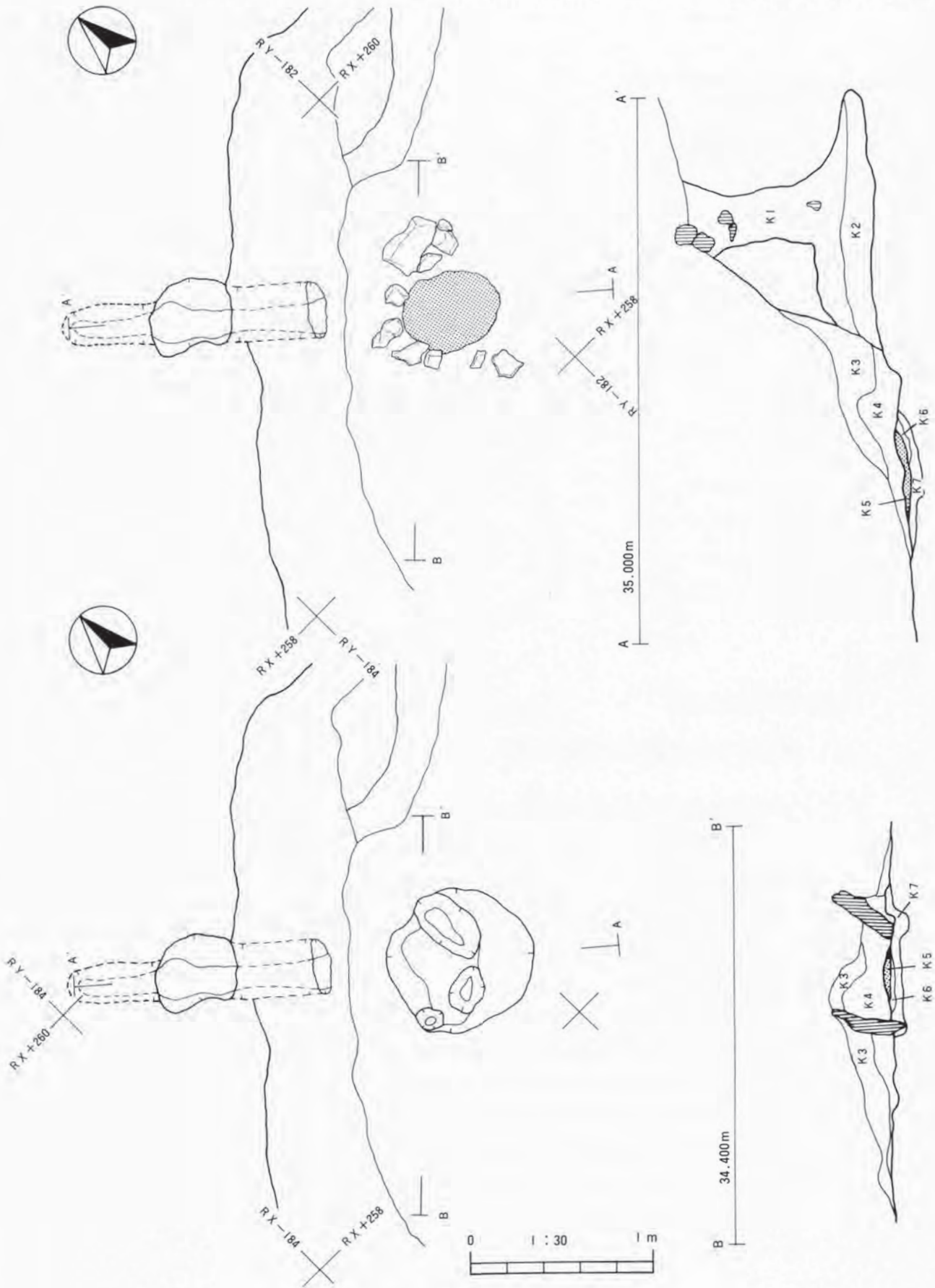
柱穴はP1～P4が柱痕跡を有し、壁からやや離れ方形状に配列する。規模はP1が径33×



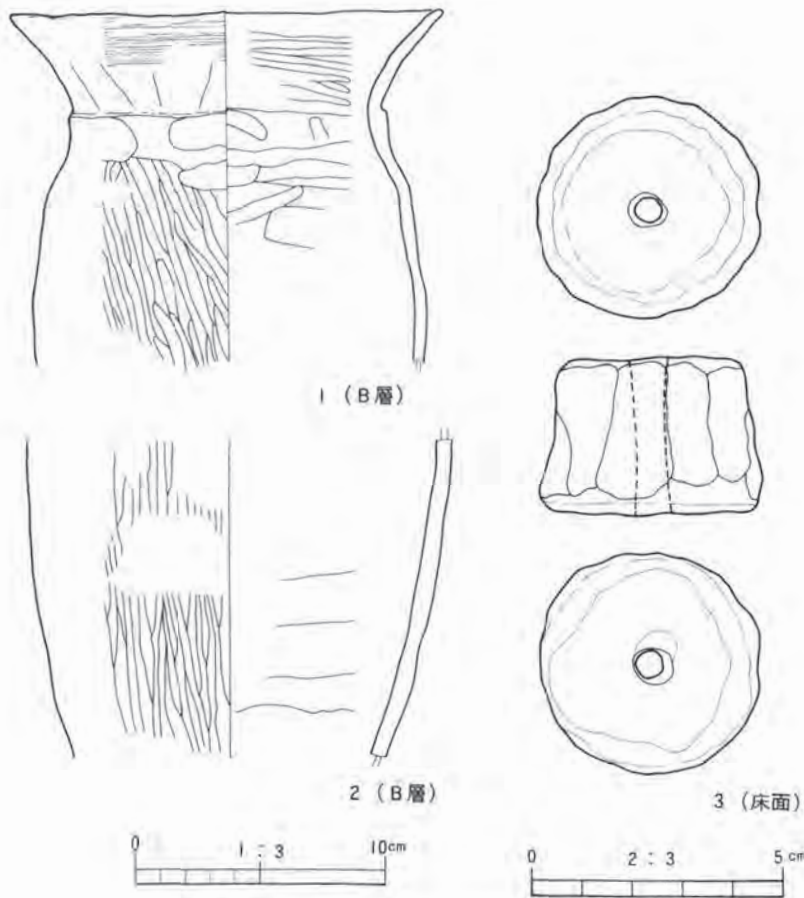
第12図 第2号 豎穴住居跡



第13图 第2号竖穴住居跡断面图



第14図 第2号竪穴住居跡カマド



第15図 第2号竪穴住居跡出土遺物

cmを計る。煙出口は楕円形で長径44cmを計り、煙出口付近の埋土に礫が多い。煙道および煙出しの埋土はK1層～K4層である。K1層は黄褐色のシルト質土でやわらかくしまりがいい。K2層は灰黄褐色～にぶい黄褐色のシルト質土でやわらかくしまりがいい。K3層は浅黄褐色のシルト～砂礫質土であまりしまりがなく、地山層に近い土性である。K4層は、明黄褐色のシルト～粘質土で焼土粒、炭化物粒をわずかに含む。

出土遺物（第15図）

1はB層内から出土した甕で、体部下半を欠く。口縁部は外傾し、頸部にわずかな段を有する。口縁部が最大径である。器面調整は口縁部外面が縦方向のヘラケズリに上半に横ナデが入る。体部外面はミガキであるが、頸部付近は一部横方向に削られている。内面は口縁部が横方向のミガキ、体部がヘラケズリである。2はB層内から出土した甕の体部である。内面は磨滅しているが、積み上げの痕跡が見られる。外面の器面調整はミガキである。3は土製紡垂車で床面より出土している。最大径4.3cm、厚さ3.2cmで、中央に径約0.5cmの貫通孔がある。その他に埋土中から、坏の破片、縄文土器の破片が若干出土している。

30cm、深さ50cm、柱痕跡径12cm。P2が径23×20cm、深さ24cm、柱痕跡径11cm、P3が径31×28cm、深さ32cm、柱痕跡径20cm、P4が径35×32cm、深さ42cm、柱痕跡径19cmである。P6は小ビット、P5、7、8、9は深さ10～27cmの皿状ビットである。

カマドは北西壁中央に構築されている。長軸方向はW-40°-E。本体部は崩壊しているが、板状礫、角礫が残る。燃焼部は81×79cmのほぼ円形の範囲が8cm程掘り込まれ、K5～8層を詰め、K5層上面を火焼面としている。K5層は焼土層で良く焼けて固くしめる。層厚は5cm。K6層は黄褐色のシルト質土でより明色な黄褐色土塊を少量含み、しまりがいい。K7層は明黄色のシルト～砂質土でやわらかくあまりしまりがいい。煙道は削り貫きで、幅は30cmで、煙道内の勾配はほとんどなく水平方向に145cmの長さを有するが、焚口から92cm程で煙出口に向け垂直に立ち上がる。煙出口からの深さは105

第3号竪穴住居跡（第16～19図）

第2号竪穴住居跡の南東8m付近に位置する。

平面形は隅丸方形を呈し、規模は北西～南東方向で5.95m、北東～南西方向で6.25mを計り、今回の調査で確認された竪穴住居跡の中で最も大きいものである。

壁は緩やかに外傾するが、北東壁では直に立ち上がる。壁高は北西壁で最大0.65m、南東壁で低く0.20mを計る。

埋土はA層、B層、C層に大別される。

A層は黒褐色のシルト質土で小角礫を含み、しまりが無い。B層は黒～黒褐色のシルト質土を基本土とし、混入土はほとんど見られない。炭化物粒を含む。色調によりB1層とB2層に分けられ、B2層はB1層より暗色を呈す。

C層は黄褐色のシルト～砂礫質土を基本土とし、6層に分けられる。C1層は黒褐色土塊を混入し、炭化物粒をやや多く含む。C2層はにぶい黄褐色土を混入し、少量の炭化物粒を含む。固くしまりがある。C3層は暗褐色土をわずかに混入し、固くしまりのある層である。C4層は地山層に近く、浅黄橙色の砂礫質土の混入が多い。少量の炭化物粒を含む。C5層は砂礫質土の混入がさらに多い。C6層は最も明色でやや粘性がある。

床面は平坦でやや固くしまりがある。

周溝は南隅を中心に南西壁、南東壁下の一部に見られる。幅は14～29cm、深さは17cm程である。埋土のD層は浅黄橙色の砂礫質で真砂土に近く、少量の炭化物粒を含む。

柱穴はP2、P6、P8、P10が柱痕跡を持ち、壁からやや離れた四隅に方形に配置される。規模はP2が径38×29cm、深さ76cm、柱痕跡径16cm、P6が径40×38cm、深さ74cm、柱痕跡径14cm、P8が径36×36cm、深さ50cm、柱痕跡径7cm、P10が径40×38cm、深さ74cm、柱痕跡径19cmである。P1、P3、P4、P9は小ピット、P5は皿状のピットである。P7、P11については、形状から補助的な柱跡とも考えられるが、詳細は不明である。

カマドは北西壁中央に構築されている。主軸方向はW-40°N。本体部は崩壊しており、石組に使用されたとと思われる大小数個の角礫が残る。燃焼部は床面から10cm程掘り込まれ、K9～K11層を詰め、K9層上面を火焼面としている。その規模は88×80cmで不整形を呈す。K9層は焼土層で良く焼けており、層厚は4cmである。K10層はにぶい黄橙色土で砂質に近い。やや固くしまっている。K11層は黄橙色土で砂質に近く、焼土塊、炭化物粒を含む。煙道は割り貫きで、長さは140cm、幅は29cmを計る。煙出口は、円形状で径は48×51cm。深さは70cm。煙道内での勾配はほとんどなく、底面は直に立ち上がり煙出口に続く。煙道および煙出口の埋土はK1層～K8層である。K1層は黄褐色シルト質土。K2層はにぶい黄褐色シルト質土で礫を含む。また、土師器甕の破片が出土している。K3層は黄褐色シルト質土でK2層に近い。K4層は黒褐色シルト質土で、やわらかくしまりが無い。炭化物粒を少量含む。K5層はK3層に類似する。K6層はK4層に類似する。K7層は淡い黄褐色のシルト～砂質土で、明黄褐色土を混入し、しまりが無い。

出土遺物（第19図）

1は床面出土の甕である。口縁部が最大径となり、体部の最大径は上半にある。口縁部はやや大きく外傾し頸部は無段であるが強く屈曲する。器面調整は口縁部が内外面とも横ナデ、体

平面形

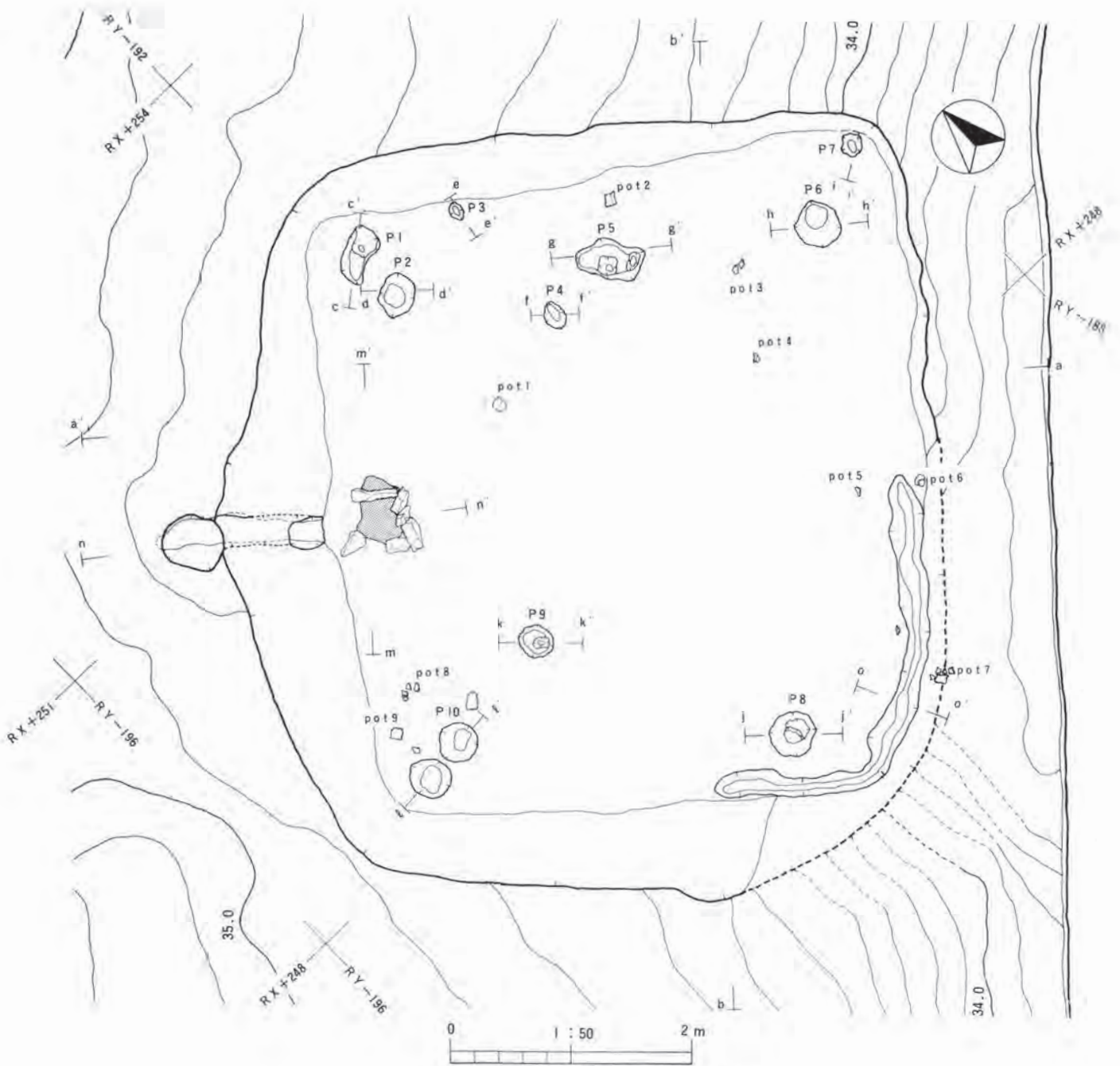
埋土

床面

周溝

柱穴

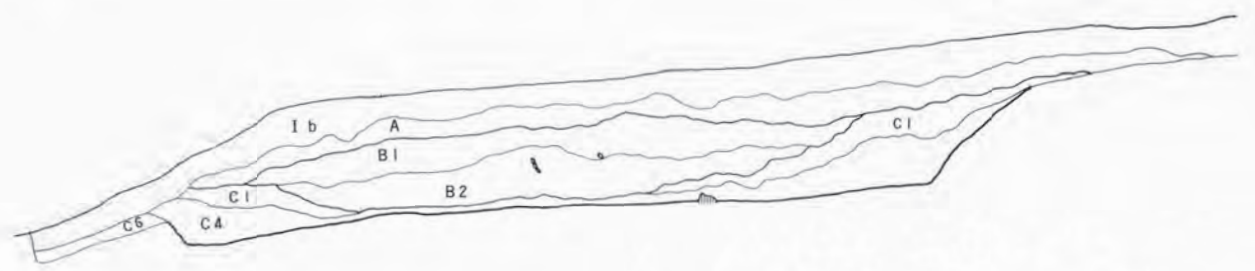
カマド



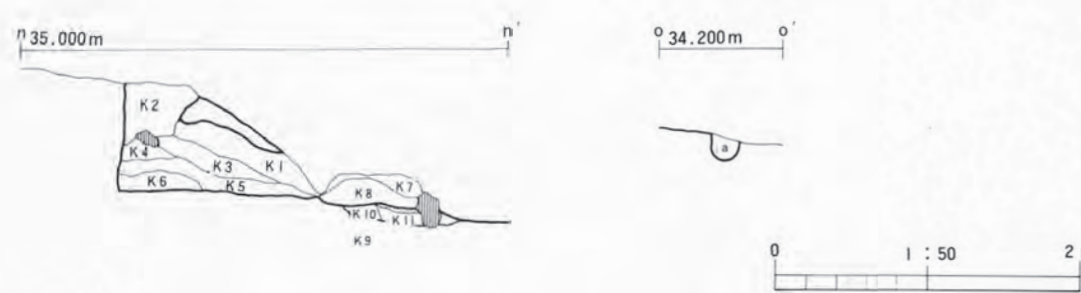
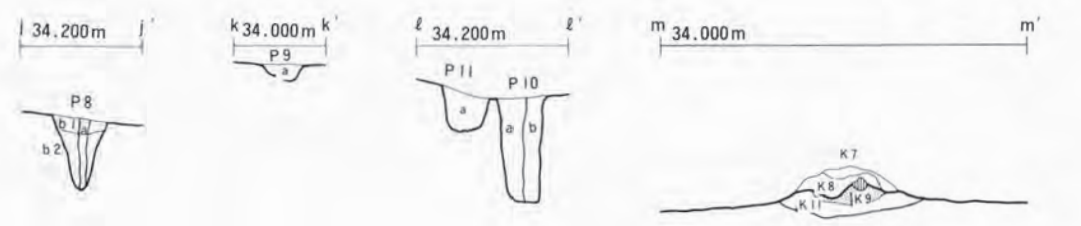
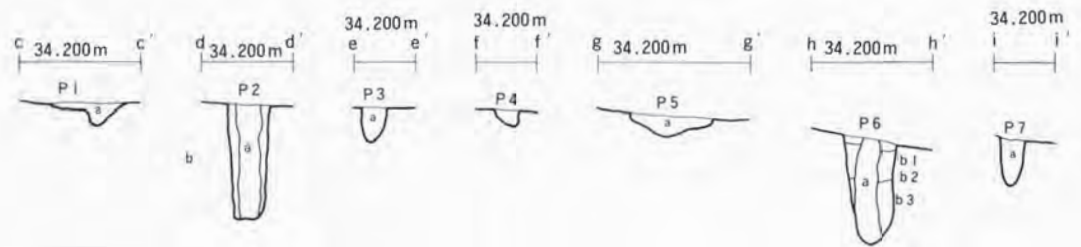
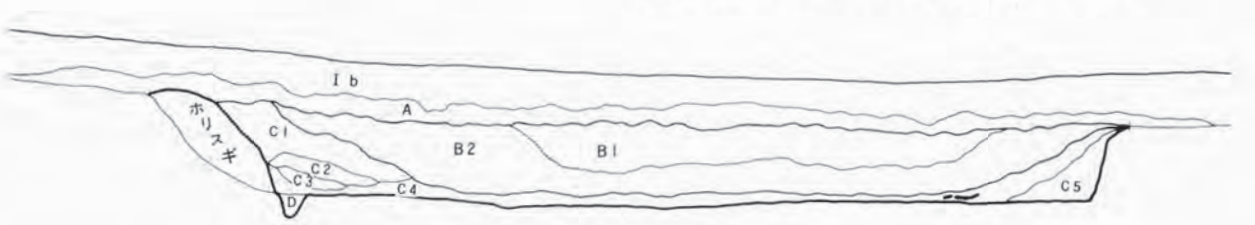
第16図 第3号 竪穴住居跡

部外面がミガキ、体部内面は磨滅している。2は床面出土の小形甕である。底部は第4号竪穴住居跡のカマド付近の床面より出土している。口縁部が最大径で体部はあまり強く膨らまない。口縁部は外傾し、頸部のくびれは小さく無段である。底部はわずかに張り出し、底部内面は調整による凹凸が目立つ。外面には木葉痕が認められるが磨滅している。器面調整は口縁部が内外面とも横ナデ、体部が内外面ともにミガキであるが、内面は糸が細く輪積みの痕跡が見られる。3はC層より出土した甕で、体部下半を欠く。最大径は口縁部であるが、体部の最大径の値も近似する。口縁部は外傾し、頸部は無段である。器面調整は口縁部が内外面とも横ナデ、体部外面がミガキである。内面は磨滅により不明。4はカマドの煙出口付近のK3層より出土

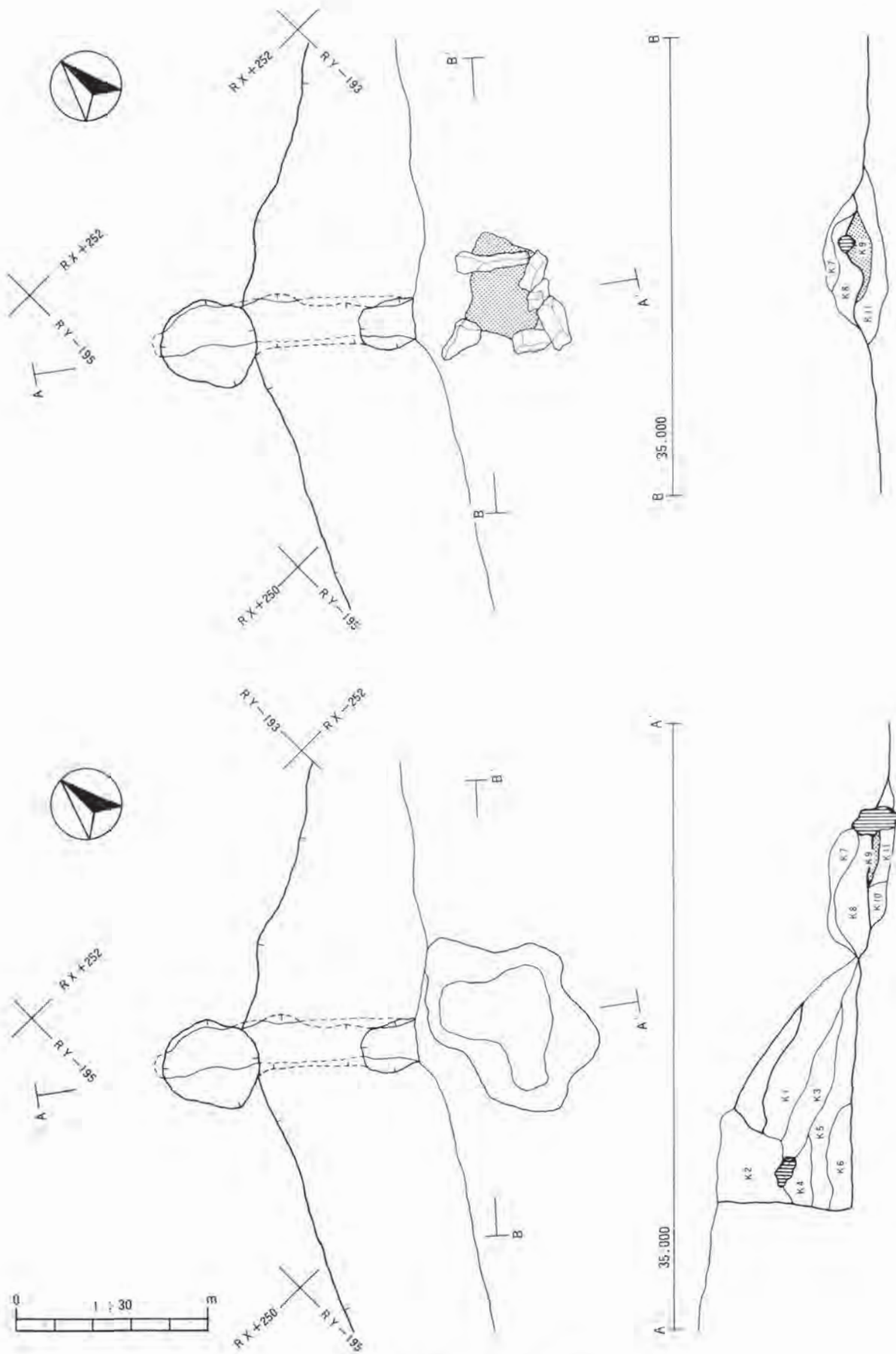
a 35.600m a'



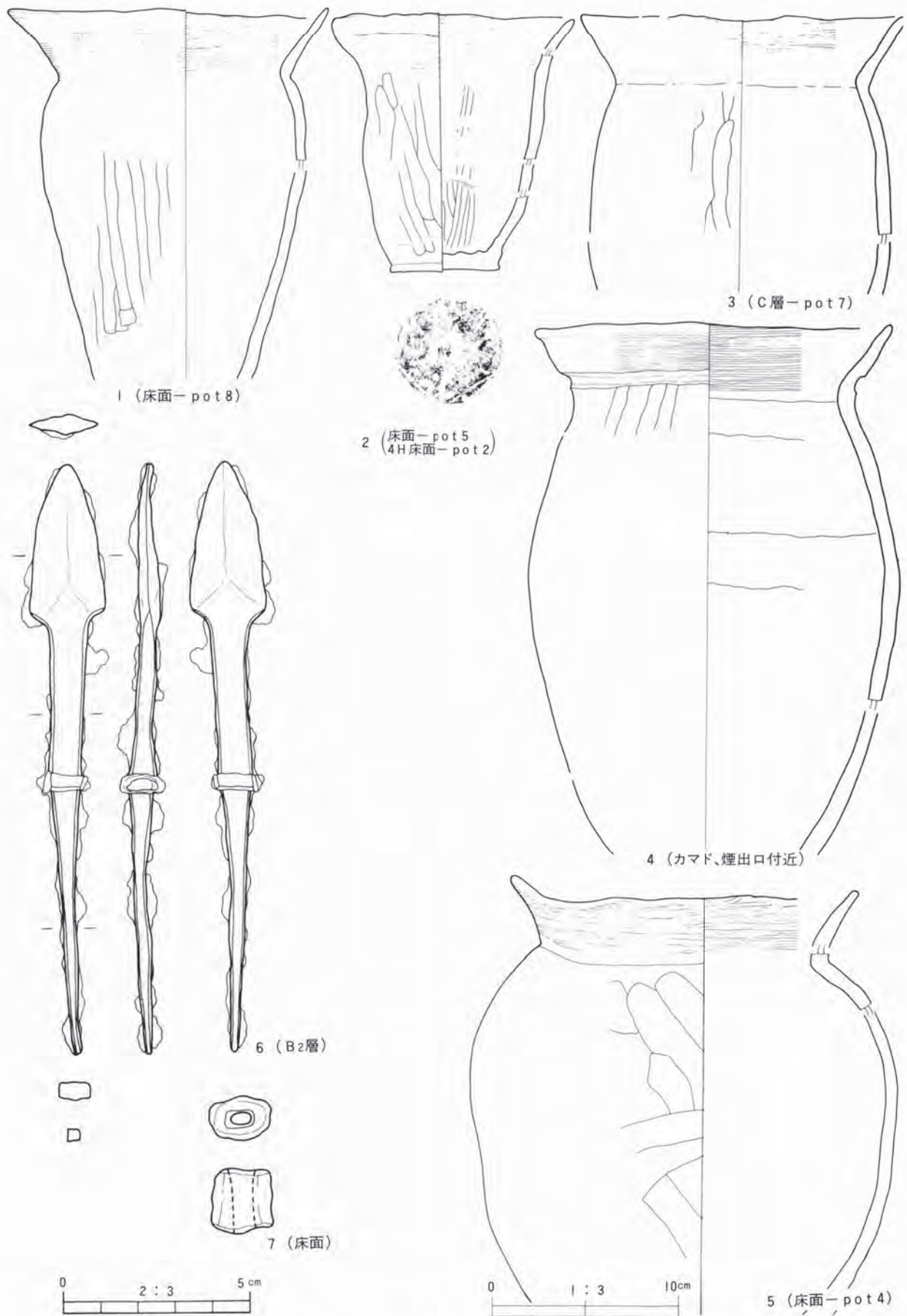
b 35.600m b'



第17図 第3号竪穴住居跡断面図



第18図 第3号竖穴住居跡カマド



第19図 第3号竪穴住居跡出土遺物

した甕で、体部下半を欠く。体部の最大径は中央部にある。口縁部は外傾し、頸部に幅0.9cmほどの沈線が認められる。器面調整は口縁部が内外面ともに横ナデ、体部外面はミガキ、内面には輪積みの痕跡が見られる。5は床面出土の甕で、球胴形を呈する。体部中央付近が最大径となり、口縁部は外傾し、頸部は無段であるが強く屈曲する。器面調整は口縁部が内外面とも横ナデ体部外面がへラナデ、内面は磨滅している。

6はB2層出土の鉄器で、長さは15.9cmで、厚さは最大1.2cmである。7は床面出土の有孔土製器である。孔の断面形は楕円で5×3cm程の大きさである。

第4号竪穴住居跡（第20～22図）

第3号竪穴住居跡の南西約4.8m付近に位置する。調査区内を横断するように確認された第1号溝跡により南東壁から約1.5mの幅を東西方向に切られる。

平面形

平面形はやや不整を呈すが隅丸方形で、カマドによる主軸方向は、他の住居跡より西へ傾く。規模は北西～南東方向で4.5m、北東～南西方向で4.32mを計る。

壁

壁は北西壁、北東壁は床面から直に立ち上がり、北西壁は上部で緩やかに外傾する。南東壁は外傾する。壁高は南西壁で最高0.65m、北東壁が低く0.18mを計る。

埋土

埋土はA層、B層、C層、D層に大別され、A層は第4号竪穴住居跡、第1号溝跡の両遺構を覆う。

A層は黒褐色のシルト質土で、小角礫を含み、やややわらかく、しまりがない。C層は黒～黒褐色のシルト質土にふい黄褐色土を含む。C1層はC2層に比し暗く、炭化物粒を少量含む。D層は黄褐色～褐色のシルト～砂礫質土で比較的固くしまる。D2層には粘質土の混入がみられ、また、真砂土（粒）を多く含む。B層は、第1号溝跡の埋土である。

床面

床面は平坦でやや固くしまる。周溝は認められない。

柱穴

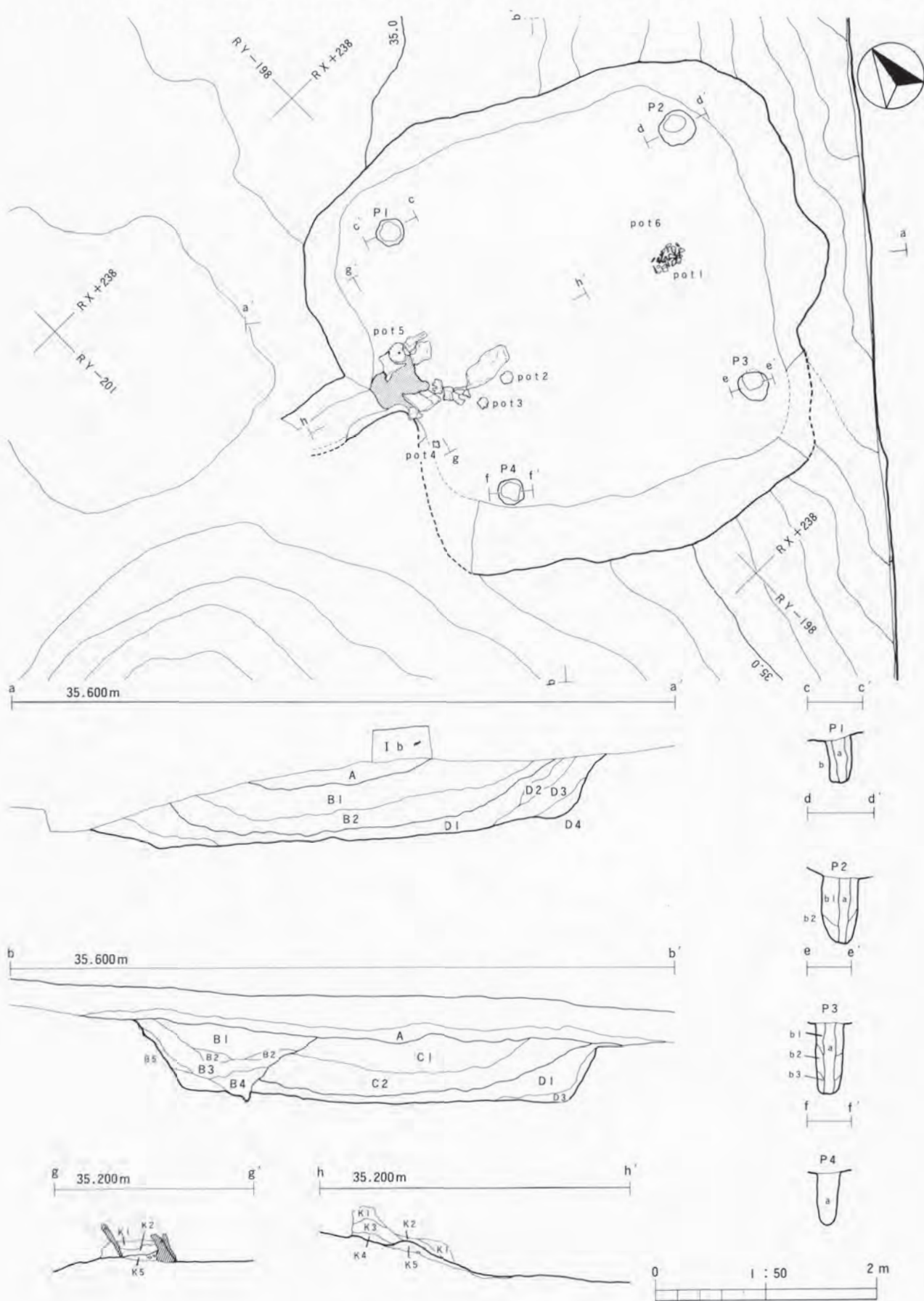
柱穴は四隅に方形に配置される。P1、P3は壁からやや離れるが、P2、P4は比較的壁に近く位置する。規模はP1が25×25cm、深さ42cm、柱痕跡径11cm、P2が径32×31cm、深さ61cm、柱痕跡径10cm、P3が径26×28cm、深さ64cm、柱痕跡径9cm、P4が径22×24cm、深さ43cmで柱痕跡は明確に判別できなかった。

床面・貼床

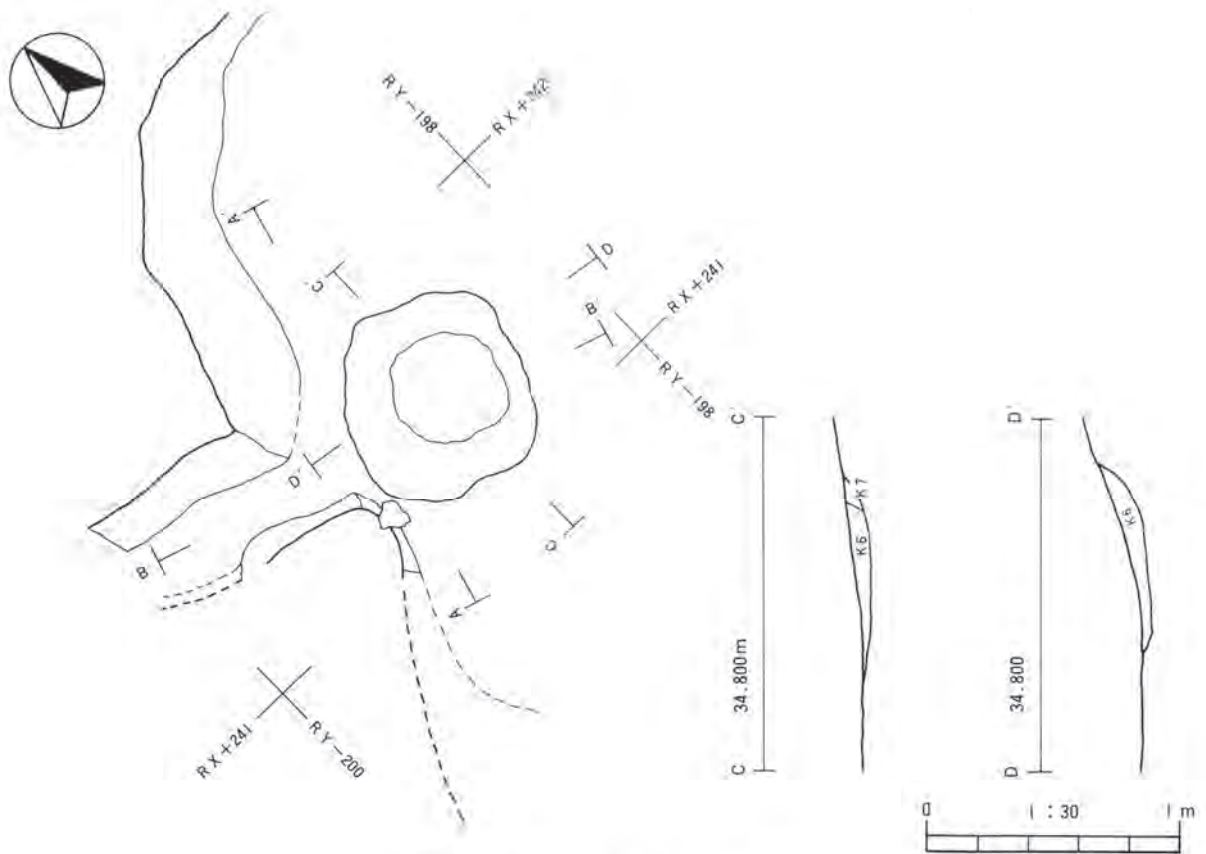
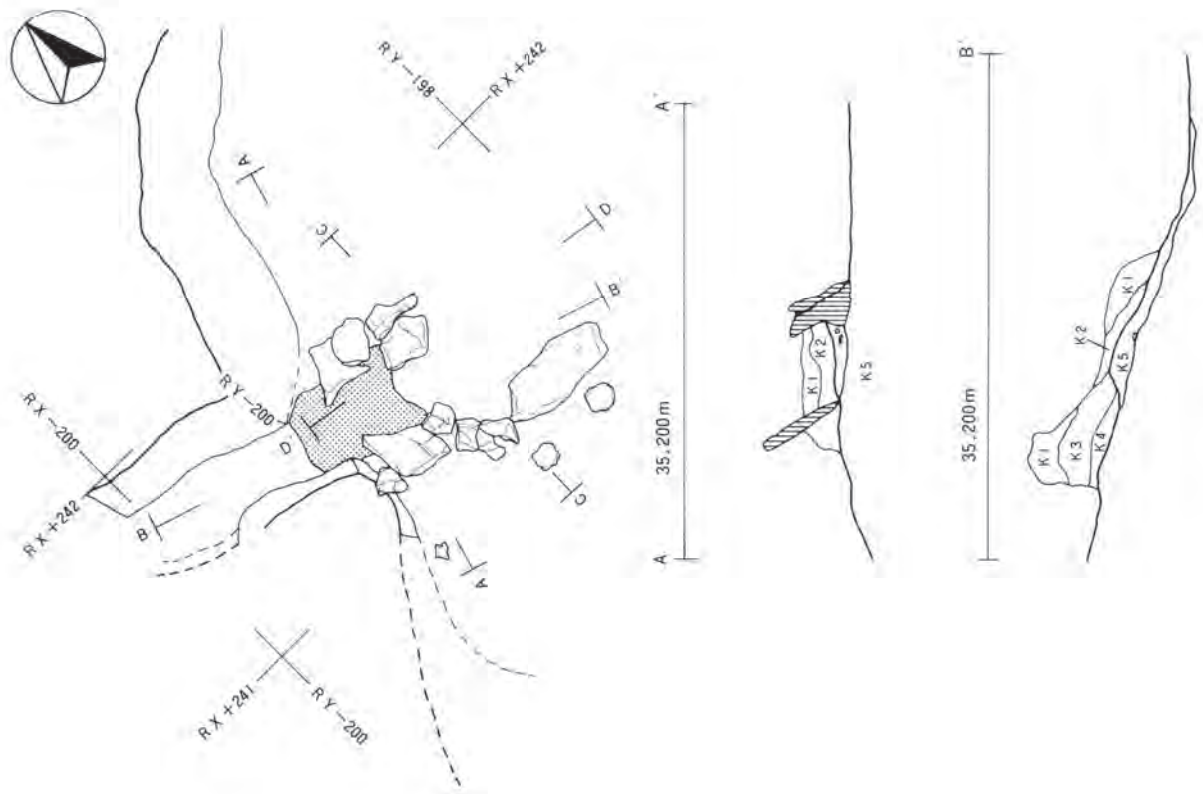
カマド

カマドは西壁の中央部に構築されており、長軸方向はW-14°N。本体部は崩壊しているが他の住居跡に比し、残存状況は良く、燃焼部の両側に設置された板状礫が斜状となったまま残る。また、近くに天井部に使用したと思われる角礫が残る。燃焼部は8cm程の深さで四状に掘り込まれ、その規模は80×73cmであり、K6層、K7層を詰め、K6層上面が火焼面となる。K6層はにふい黄褐色で砂礫質で、固くしまる。やや明るい褐色土を混入土とし、焼土粒をわずかに含む。K7層はやや明るい黄褐色で真砂土の混入が多く、焼土粒をわずかに含む。

煙道は、第1号溝跡により壊されており、焚口側が残るのみである。長さ等の規模は不明であるが、残存部で長さ80cmを計り、緩やかな傾斜をもつ。煙出口は残らない。K2層は明黄褐色のシルト質土を基本土とするが、焼土粒～塊を多量に含む固くしまる。K3層は黄褐色のシルト～砂礫質土でやわらかくしまりがない。土性が地山層に近く煙道の崩壊土と思われる層である。K4層は暗褐色シルト質土でやわらかくしまりがない。少量の炭化物粒を含む。K5層は黄褐色のシルト～粘質土で固くしまる。焼土粒、炭化物粒をわずかに含む。



第20図 第4号 豎穴住居跡



第21図 第4号竪穴住居跡カマド

出土遺物（第22図）

1、2は床面出土の坏である。1の口縁は内湾し、体部に不明瞭な沈線を有す。底面は平底風の丸底である。器面調整は外面がミガキに、沈線内部に横ナデが入る。内面はミガキで、黒色処理されている。2は口縁が外傾し体部に顕著な段を有する。内面には稜が認められる。底面は平底風の丸底である。器面調整は外面が段を境に上部が横ナデ、下部がミガキ、内面がミガキで、黒色処理されているが、二次的な焼成により部分的に残る。

3は床面出土の甕の底部で、底面が破損している。張り出しはなく、器面調整は外面がミガキで、内面には溝状の調整痕がある。4は床面出土の甕の底部および体部の下半である。底部は張り出し、底面に木葉痕がある。器面調整は体部外面がミガキに、刷毛目が縦方向に入り、内面には溝状の調整痕がある。5は床面出土の甕の底部および体部の一部である。底部の張り出しは磨滅し、底面に木葉痕がある。器面調整は体部外面がミガキで、内面は磨滅している。6は床面出土の甕で、ほぼ完形品である。口縁部が最大径となり、体部は緩やかに膨らみ体部の最大径は中央部にある。口縁部は外傾し、頸部に不明瞭な段を有する。底部は張り出し、底面は破損している。器面調整は口縁部が内外面とも横ナデ、体部外面はミガキに、一部ケズリで、内面は横ナデである。7はB層内より出土した甕の口縁および体部の一部である。体部はゆるやかにふくらみ、最大径は中央部にある。口縁部は外傾し、頸部は無段である。器面調整は口縁部が内外面ともに横ナデ、体部外面がミガキ、内面が刷毛目である。

第5号竪穴住居跡（第23～28図）

第4号竪穴住居跡の南西16.5m付近に位置する。第6号竪穴住居跡、第5号土坑跡を切る。

平面形はほぼ整形な隅丸方形を呈し、規模は北西～南東方向で5.2m、北東～南西方向で5.7mを計る。

第6号竪穴住居跡のE1層上面から掘り込まれており、壁は床面からほぼ直に立ち上がる。壁高は南西壁で0.7m、南東壁で0.3mを計る。

埋土はA層、B層、C層、D層に大別され、A層は第5号竪穴住居跡、第6号竪穴住居跡の両遺構を覆う。

A層は黒褐色のシルト質土を基本土とし褐色土を混入し、やや固い。

B層は黄褐色のシルト～砂質土を基本土とし黒褐色土を混入する。炭化物粒をわずかに含みやや固くしまりがある。

C層は黒褐色のシルト質土を基本土とし、3層に細分される。C1層はやや明るい褐色土を混入し、やや固くしまりがある。炭化物粒を含む。C2層は褐色土を混入するが、混入量がC1層より多く、やや固くしまりがある。炭化物粒を含む。C3層は黒褐色土を混入し、C1層C2層よりやわらかい。炭化物粒を比較的多く含む。

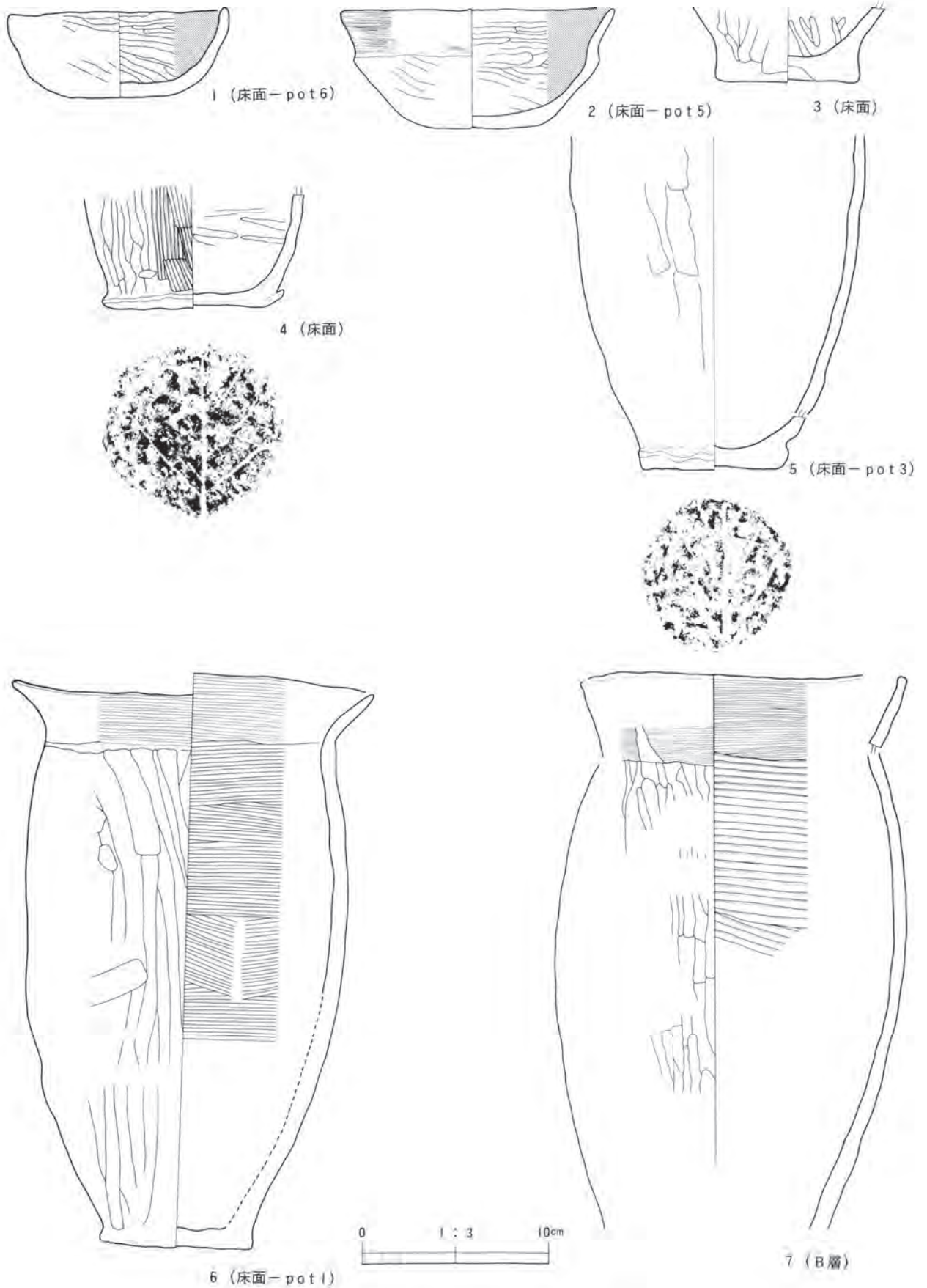
D層は黄褐色のシルト～砂質土を基本土とし、5層に細分される。D1層はやや暗色で混入土は特に見られない。D2層は粒～塊状の黒褐色土をわずかに混入し、炭化物粒を含む。D3層はD2層と同質の混入土をもつが、混入量が多い。炭化物粒を含む。D4層は基本土がやや明色で粘質をもつ。暗黄褐色土を含み、やや固くしまりがある。D5層は黄褐色土と粒状の真砂土を含み、やや固くしまりがある。

床面は平坦でやや固い。中央部付近に土器片が集中する。周溝は認められない。

平面形

壁

埋土



第22図 第4号竖穴住居跡出土遺物

柱穴はP1～P4で、壁からやや離れた四隅に方形状に配置される。規模はP1が径32×30cm、深さ58cm、柱痕跡径17cm。P2が径36×32cm、深さ49cm、柱痕跡径13cmで形状が先細りである。P3が径30×30cm、深さ30cmで、柱痕跡は判別できなかった。P4が径25×22cm、深さ76cm、柱痕跡9cm。P5が小ピットで、P6は皿状ピットである。

柱 穴

カマドは北西壁中央に構築されている。長軸方向はW-41°-N。本体部は崩壊しているが、石組に使われたと思われる角礫が付近に残る。また、火焼面中央に、土師器底部が残り焼台として使用されたものと思われる。燃焼部は掘り込まれ、K7層～K8層を詰め、K7層上面が火焼面となる。規模は83×65cm、深さ10cmである。K7層は淡黄色の砂礫質土で焼土粒～塊を多量に含み、固くしまる。K8層は褐色のシルト質土で固くしまる。煙道は削り貫きで、長さ135cm、幅40cmを計り、煙出口に向かい約15°の上り勾配を有す。煙出口は不整楕円形で径30～35cm。深さは47cmで、底にわずかな窪みをもつ。煙道および煙出しの埋土はK1層～K6層である。K1層は黄褐色シルト質土で明黄褐色土を含む。K2層は褐色のシルト質土で粘性のある黄褐色土を含む。K3層はにぶい黄色のシルト質土でやや粘性があり、暗褐色土をわずかに含む。K4層は黒褐色シルト質土で黄褐色土粒を含む。K5層は黄褐色シルト質土で炭化物粒を含みやや固くしまる。

カマド

出土遺物 (第26図)

1は床面出土の坏で完形である。口縁はやや内湾し、体部には明確な段は見られない。底面は平底風の丸底である。器面調整は内外面ともミガキで、内面は黒色処理されている。2は床面出土の甕の底部および体部下半で、底部は張り出し、底面には木葉痕がある。器面調整は外面がミガキで、内面は磨滅している。3は床面出土の甕の底部および体部下半で、底部に張り出しがあり、底面には木葉痕がある。器面調整は外面がミガキで内面が刷毛目である。4は床面出土で甕の底部である。底面に木葉痕があるが磨滅している。5はD層出土の甕で、体部下半を欠く。口縁部が最大径となり、底部に向い径が小さくなる。口縁部は外傾し、頸部は無段でくびれが小さい。器面調整は口縁部が内外面とも横ナデ、体部外面がミガキ、内面が刷毛目である。6は床面出土の甕である。最大径は口縁部で、体部の膨らみは小さい。口縁部は外傾し、頸部に幅0.6cm程の沈線がめぐる。底部は張り出し、底面に木葉痕がある。器面調整は口縁部から頸部にかけての外面が斜方向の刷毛目、体部がミガキ、底部に横ナデが入る。内面は口縁部が横ナデ、体部が斜方向の刷毛目である。

第6号竪穴住居跡 (第23図、第24図、第27図、第28図)

第5号土坑跡を切り第5号竪穴住居跡に切られる。

平面形は長丸の楕円形を呈し、規模は長軸となる北東～南西方向で8.5mを計る。北西～南東方向は第5号竪穴住居跡と重複するため明確ではないが4m程を計る。

平面形

壁は緩やかに外傾するが、北東壁はやや直に立ち上がる。壁高はおよそ0.1mを計る。

壁

埋土は黒褐色のシルト質土を基本土とするE層で2層に細分される。E2層はE1層に比べ色調がやや明るめで、黄褐色土の混入が目立つ。

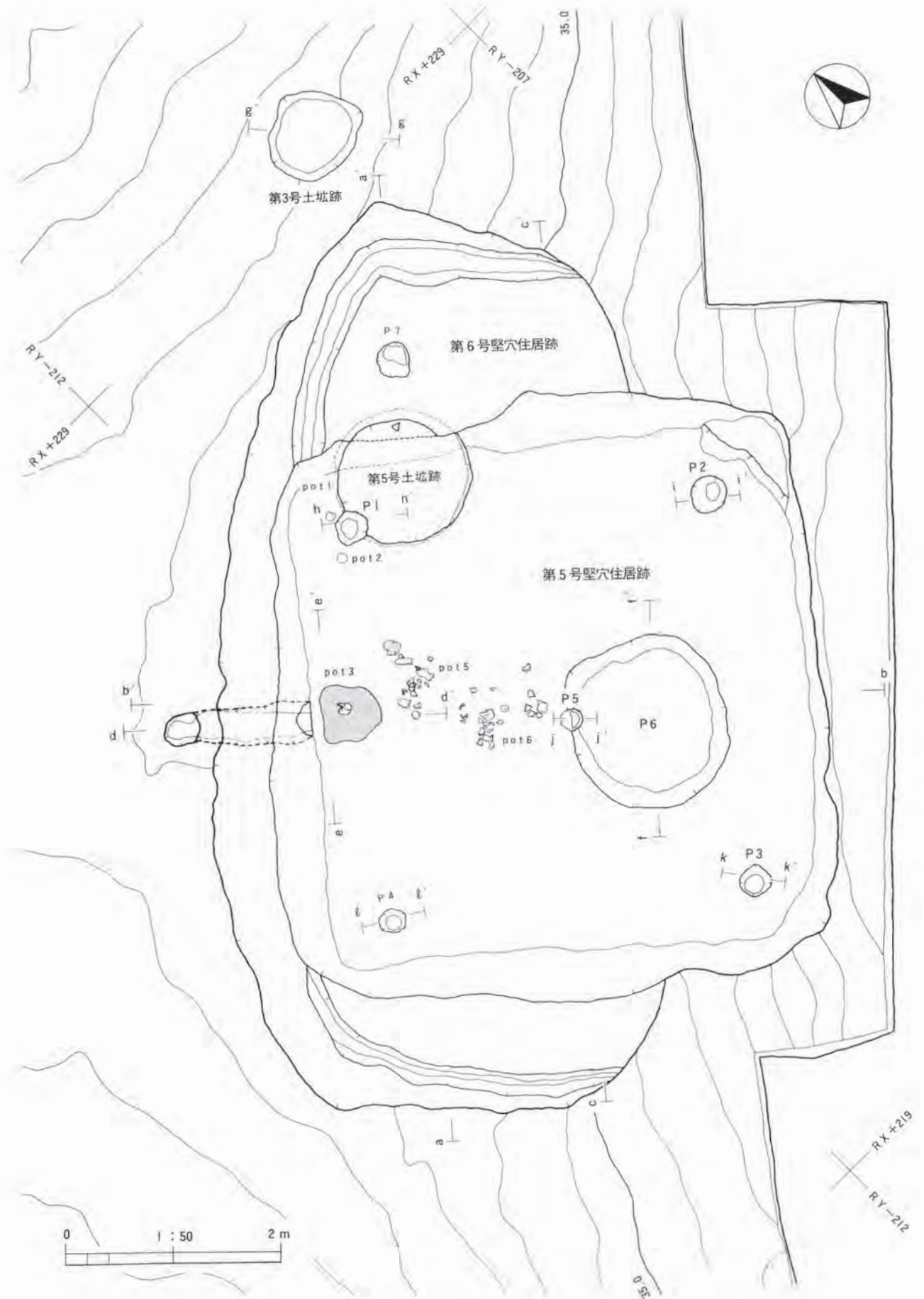
埋 土

床面は平坦で、やや固く、炉は残らない。

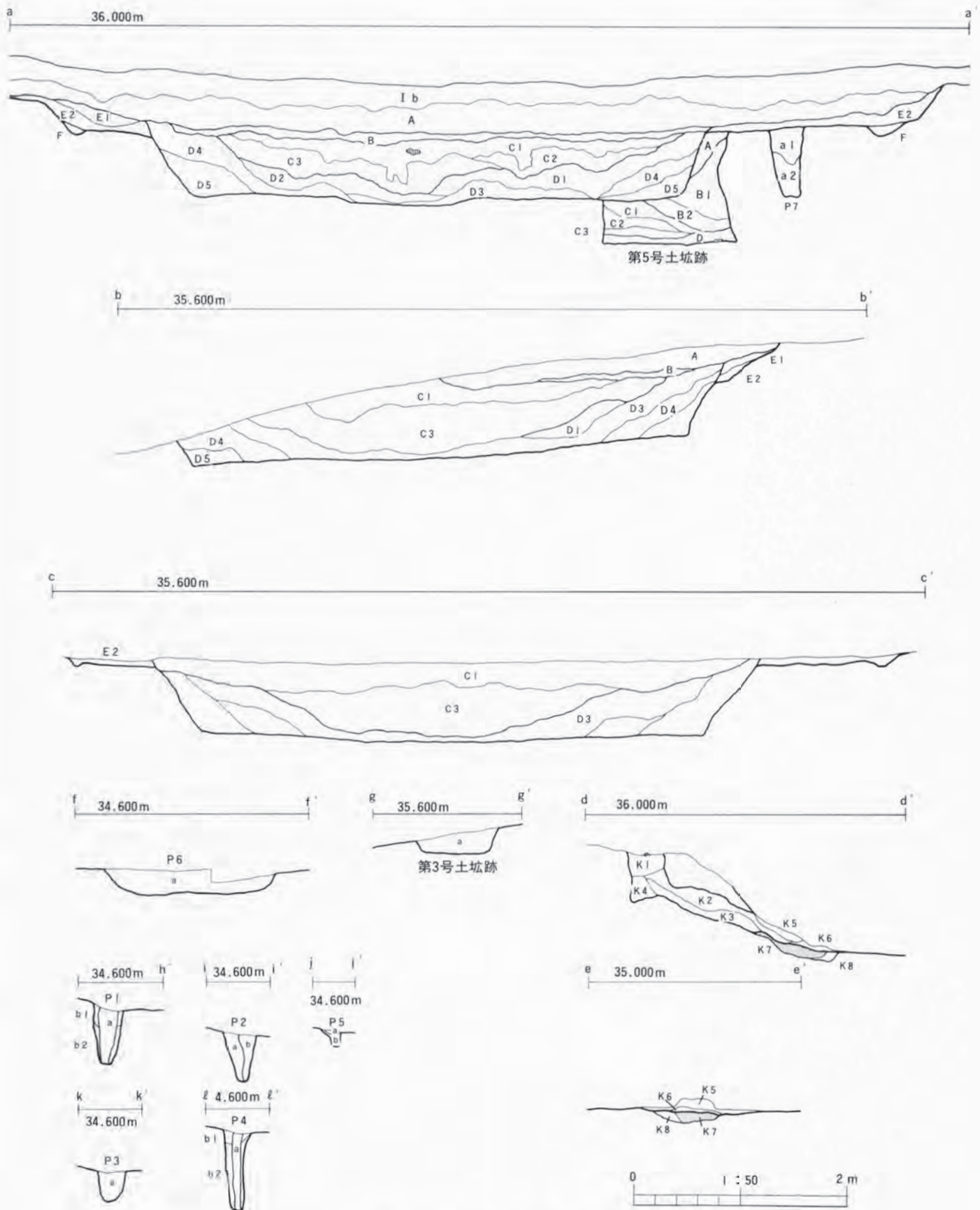
床 面

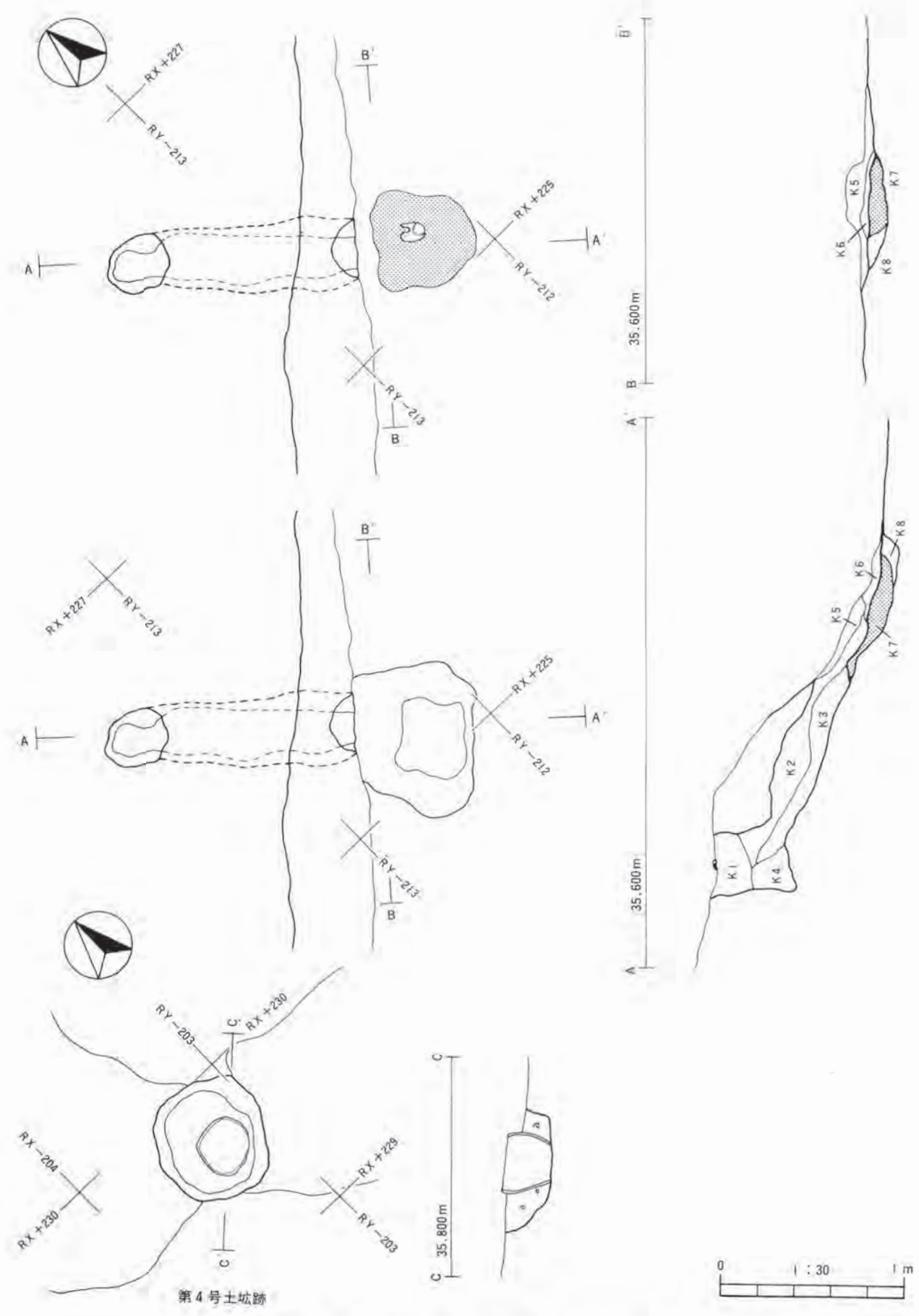
周溝は南東壁を除く各壁の下にみられる。幅は20～40cm、深さは10cm程である。埋土のF層はにぶい黄褐色で真砂土に近い。

周 溝



第23図 第5号竖穴住居跡・第6号竖穴住居跡・第3号土坑跡・第5号土坑跡





第25図 第5号竖穴住居跡カマド・第4号土壇跡

柱穴はP 7のみで、径は32×30cm、深さは65cmである。柱痕跡は明瞭ではない。

出土遺物（第27図、第28図）

重複関係にある第5号竪穴住居跡の埋土からも同時期と思われる遺物が出土しており、一括してまとめる。

7～12は常盤式に相当すると思われる土器片である。7は口縁部で交互刺穴文を施す。8は頸部の破片で複節斜縄文に磨消しによるくびれをもつ。9は条間がやや離れる撚り糸文を施したもの。10は単節斜縄文を施したもの。11は無文土器である。12は単節斜縄文を斜方向に回転するもの。

13～21はやや幅広の沈線を施すものである。13～17は横位の沈線を施すものである。8～21は磨消しと沈線で文様を描くもので、19は平行沈線、20は曲線状の沈線を施すものである。21はくずれた変形工字文が施される。

22～25は赤穴式に相当すると思われる土器片である。22、23は口縁部の破片でわずかに外反するもので、口縁部に横走る縄文を施した後に、体部には縦走る縄文を施す。24、25は縄文のみが施される。

26～39は弥生時代初頭期に相当する土器片である。26は変形工字文を描くものと思われるが粘土粒が認められ、内面にも沈線が施される。27、28、30、31は沈線と磨消しにより文様を描くものである。29は縄文施文後に沈線を施す。33は頸部から体部上半の破片で、頸部に無文帯をもつ。34～37は体部の膨らむ壺型土器の頸部の破片である。いずれも研磨されており無文である。34の頸部には沈線が施されている。38は無文に研磨された壺型土器の体部下半の破片である。

39は縄文時代後期の土器片で、沈線を横V字形に施し、沈線間を磨消している。

40は陶器片でオリブ褐色を呈す。内面に沈線により蓮弁文を施す。41は一方の側縁部に使用痕の認められる剥片である。42は一方の側縁部に細かい剥離を加え刃部をつくるものである。

第1号土壇跡（第33図）

第4号竪穴住居跡の北側3.5mに位置する皿状の土壇である。開口部径は、1.1mではほぼ円形を呈する。底部は長径0.94mの楕円形となり平坦である。深さは0.18mである。

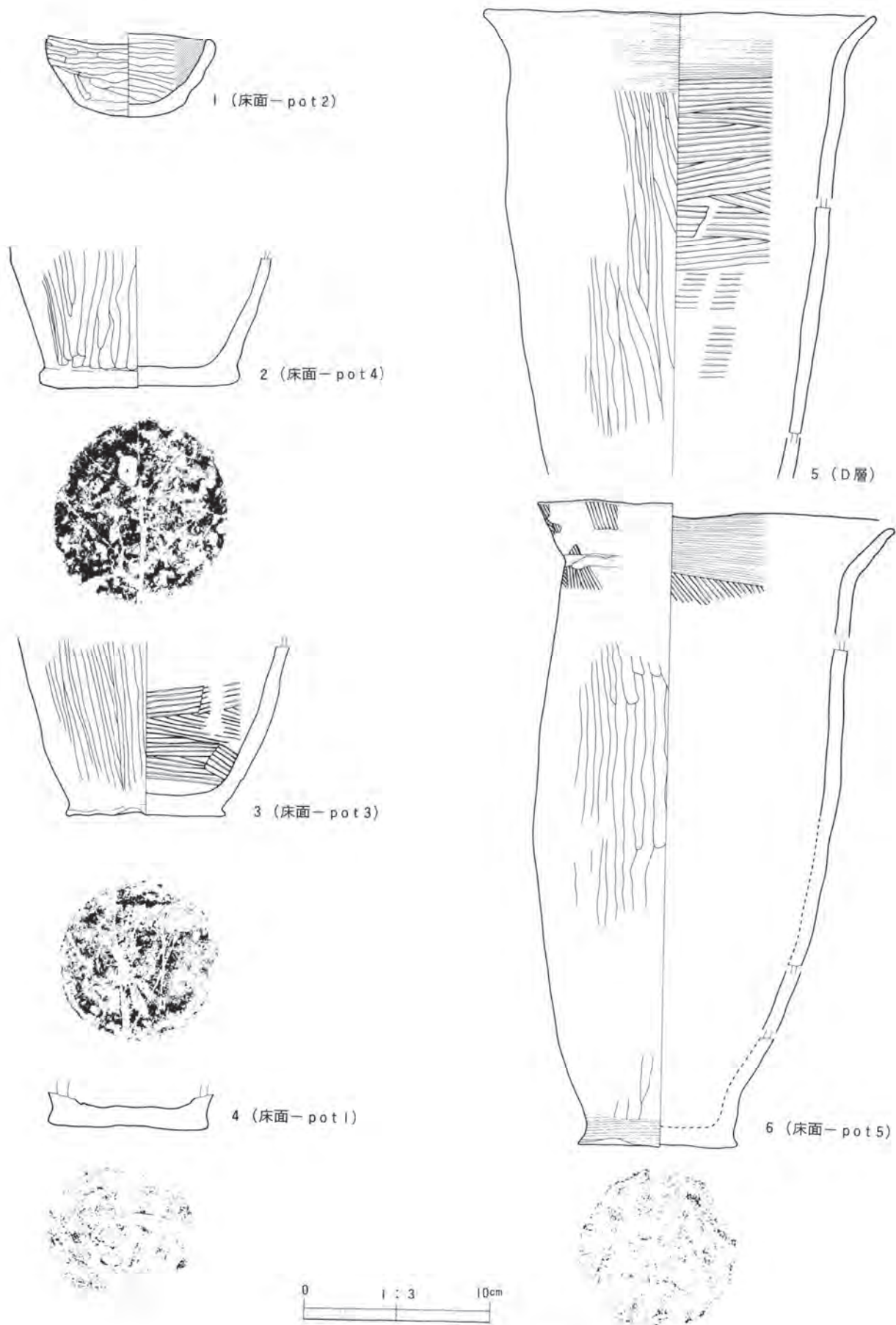
埋土は単層でにぶい黄褐色のシルト～砂礫質土で固くしまる。出土遺物はない。

第2号土壇跡（第33図、第31図）

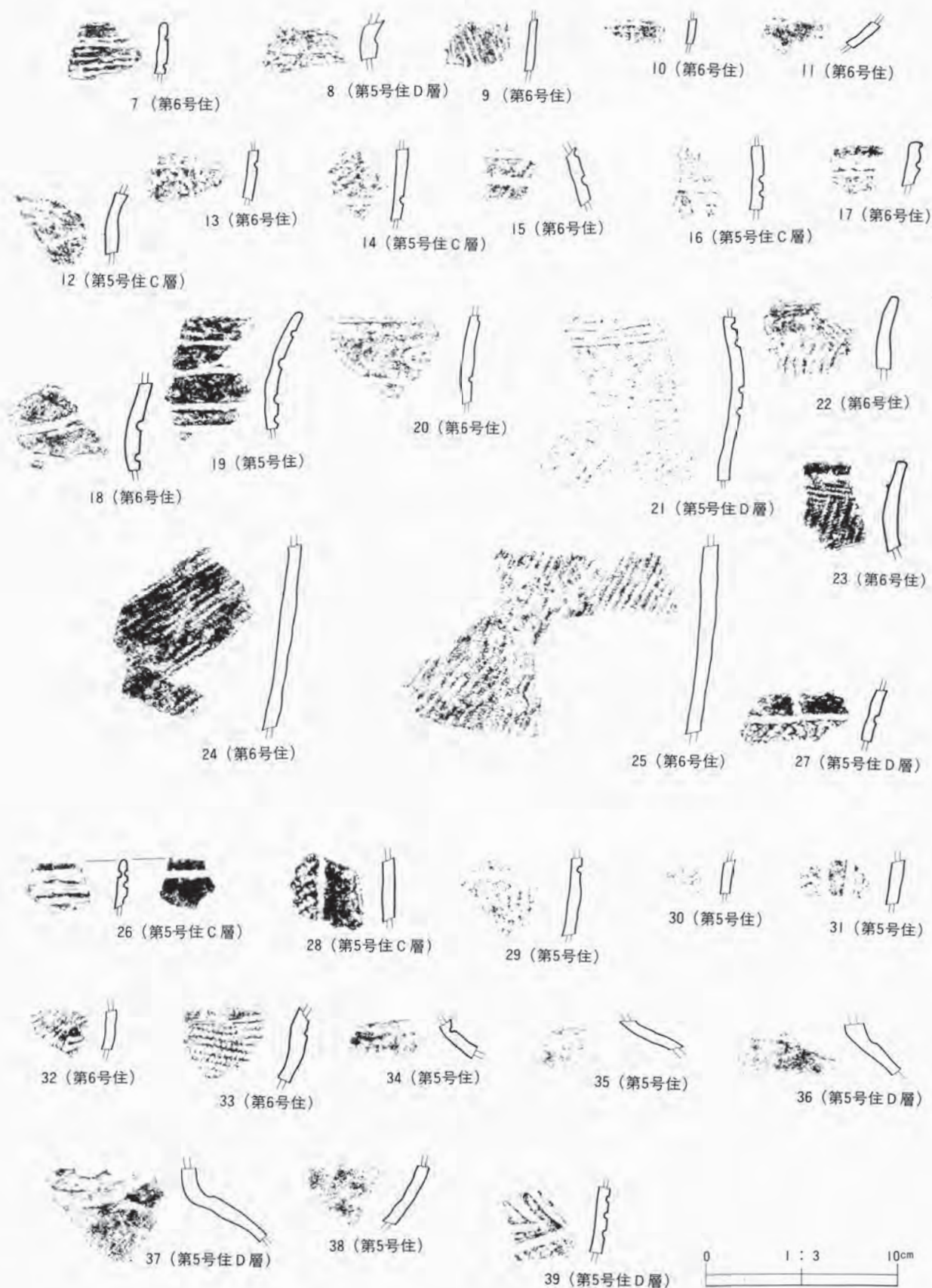
第1号土壇跡の南側に隣接する。平面形は2つの円形土壇をつなぎ合わせたような形状を呈す。西側の円形状の部分の開口径は1mで、全体の長軸の長さは2.3m、深さは平均0.3mである。底面は平坦であり、中央付近に焼面が確認された。

埋土はA～F層に別けられるが、全体に炭化物粒を含み、土性はシルト～砂礫質でやや固くしまりがある。A層は黄褐色土で地山層粒の混入が多くみられる。B層は褐色～暗褐色層で、炭化物粒の混入が特に多い。C層は褐色層で暗褐色土を多く含む。D層は黄褐色層で焼土粒まじりである。E層はにぶい黄褐色層である。F層はにぶい黄褐色層に多量の焼土粒～塊を混入する。

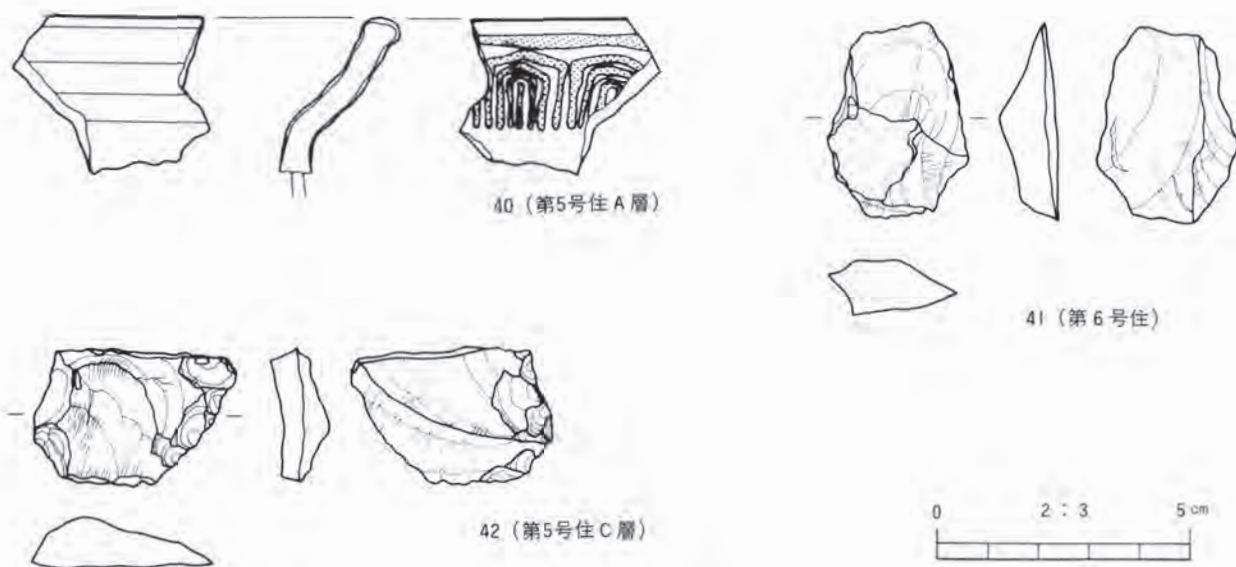
出土遺物は土器片が埋土中よりわずかに出土している。第31図3は単節斜縄文を縦方向に回転させ曲線状の沈線を施すものである。



第26図 第5号竖穴住居跡出土遺物



第27图 第5号竖穴住居跡·第6号竖穴住居跡出土遺物(1)



第28図 第5号竪穴住居跡・第6号竪穴住居跡出土遺物(2)

第3号土坑跡 (第23図、第24図)

第6号竪穴住居跡の北側に位置する。開口部は不整な楕円形を呈し、径0.94～0.81mである。深さは0.23mで、底面は平坦で径0.62×0.75mである。

埋土は単層で黄褐色シルト質土に暗褐色土を含む。炭化物粒を混入し固くしまる。遺物は出土していない。

第4号土坑跡 (第25図、第31図)

第6号竪穴住居跡の北西に位置する。開口部径約0.65mのほぼ円形である。深さは0.23mで底面は平坦である。中に土器(第31図1)が正立で埋設される。

埋土は単層で、黄褐色シルト質土を基本土とし、暗褐色土を混入しやや固くしまる。

埋土されていた第31図1の土器は深鉢で、体部のみである。LR単節斜縄文を縦方向に回転させている。

第5号土坑跡 (第23図、第24図)

第5号竪穴住居跡、第6号竪穴住居跡に切られる。平面形は円形で開口部径1.23m、胴部径1.15m、底面径1.28mで壁は下半で大きくえぐれ、断面形はややフラスコ状を呈す。底面は平坦で、深さは検出面(第6号竪穴住居跡床面)から1.27mを計る。

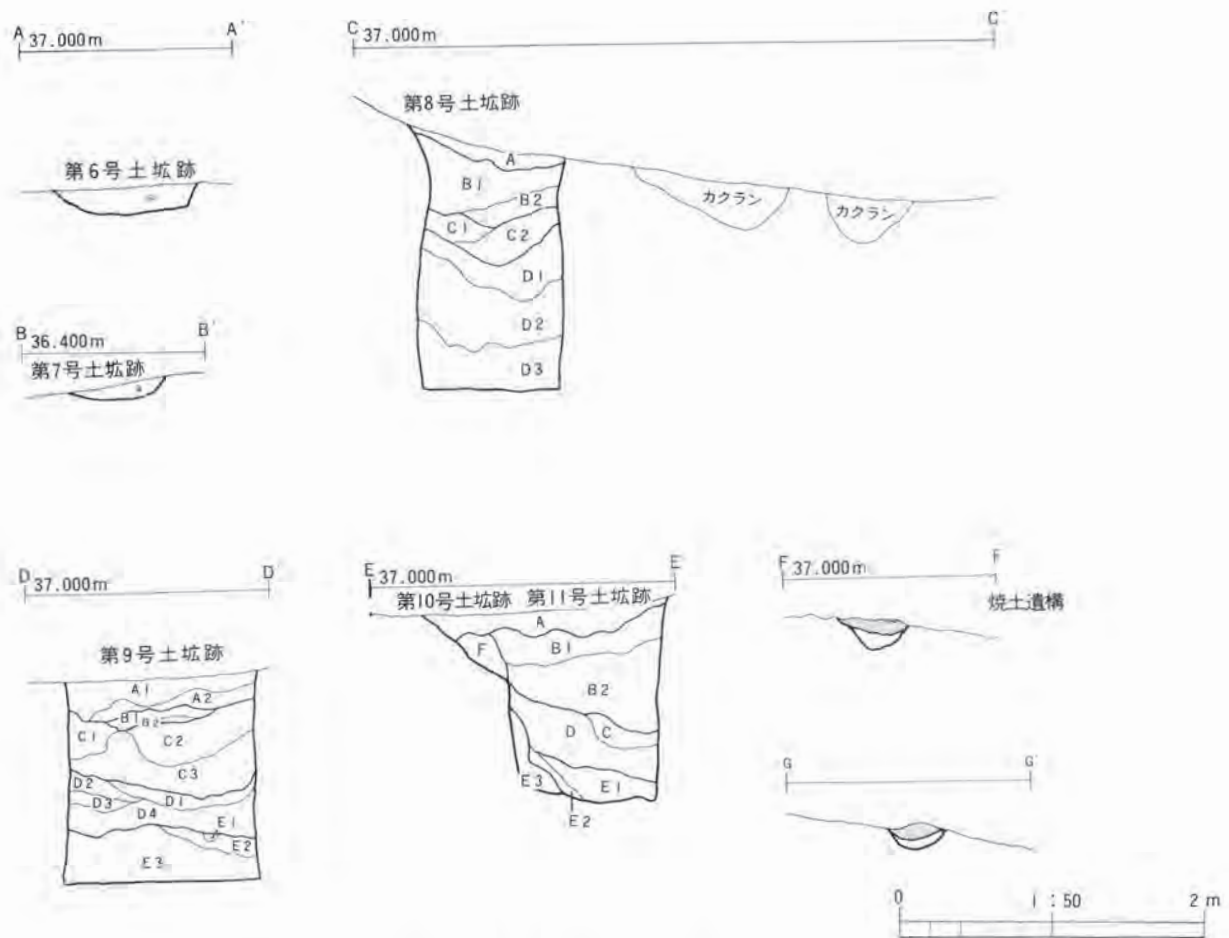
埋土はA層、B層、C層、D層に大別される。A層は褐色～黒褐色のシルト質土で固く、ややしまりがある。B層は黄褐色～褐色のシルト質土で固くしまる。D層は暗褐色の砂礫質土で炭化物粒、土器片を混入し、固くしまる。

出土遺物はD層から出土した少量の土器片があるが、図示できるものはない。

第6号土坑跡 (第29図、第30図、第31図)

調査区南端部に位置する。平面形は不整な円形を呈し、開口部で径0.86～1.03m、底面径は0.6～0.7m、深さは0.18mで底面は平坦である。皿状の断面を呈す。

埋土は単層で、黒褐色シルト質土に褐色土を含み、炭化物粒を混入する。



第30図 第6号～第11号土坑跡、焼土遺構断面図

出土遺物は少量の土器片で、第31図4～7はR.L.単節斜縄文を縦方向に回転させ、沈線を施したもの。

第7号土坑跡（第29図、第30図）

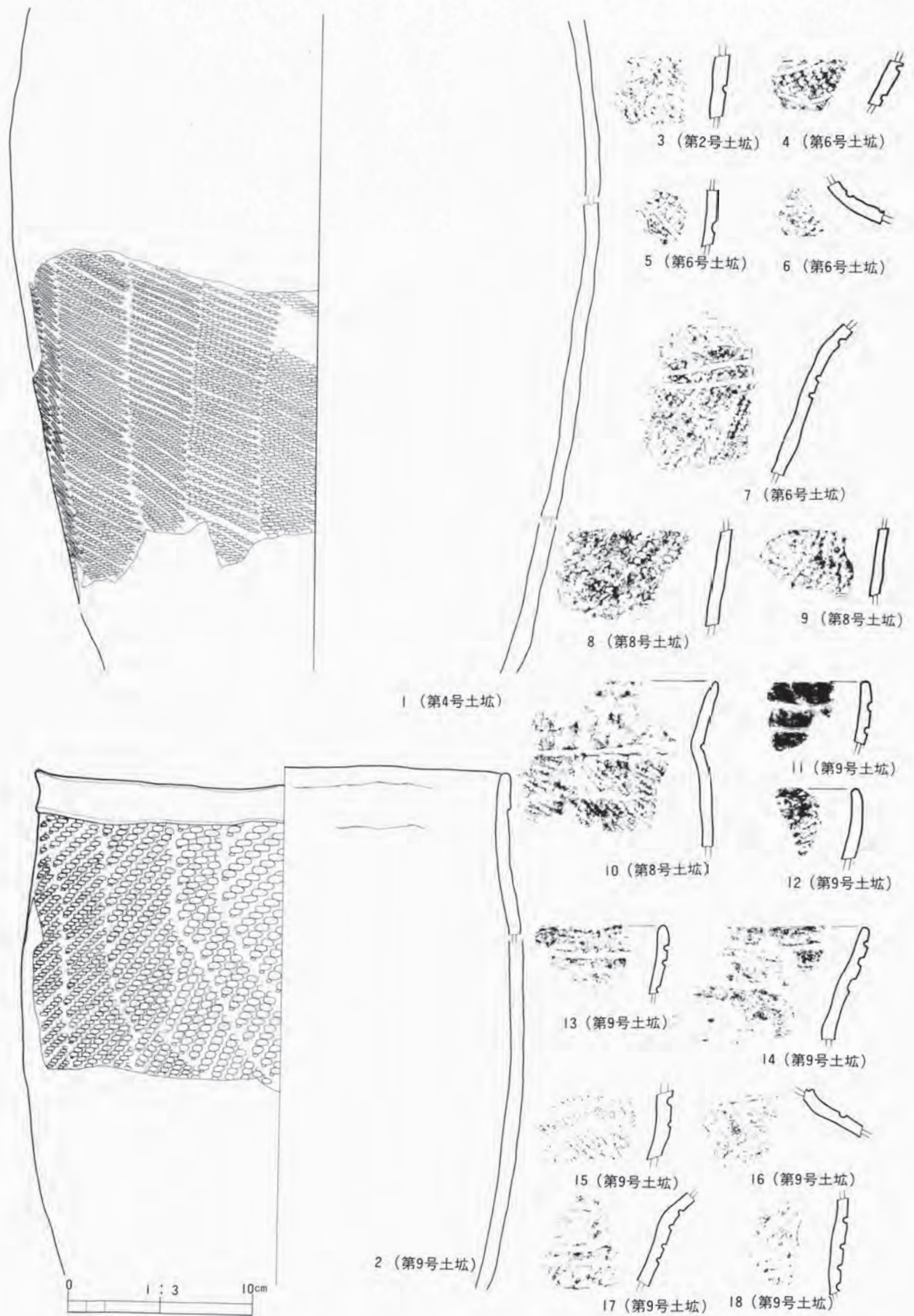
調査区南端部に位置する。平面形は不整な円形で、開口部径は0.66m、底面形は0.46～0.37m、深さは0.14mで底面は平坦である。皿状の断面を呈す。

埋土は単層でにぶい黄褐色シルト質土に炭化物粒を混入する。やや固くしまりがある。出土遺物はない。

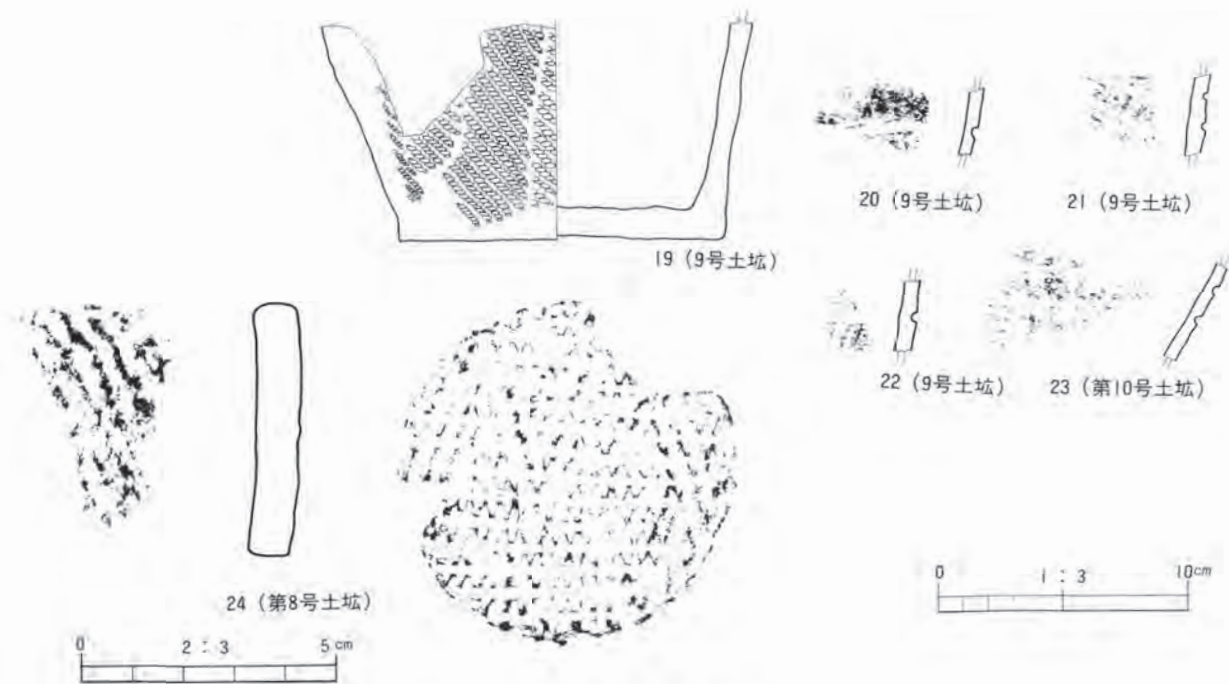
第8号土坑跡（第29号図、第30図、第31図、第32図）

調査区南端部に位置する。平面形はほぼ円形を呈し、開口部径0.86～0.98m、胴部最小径0.83m、底面形1.35mを計る。断面形はピーカー状を呈するが、深さ30cm付近でわずかにくびれをもつ。

埋土はA層、B層、C層、D層に大別される。全体的にやわらかくしまりが少ない。A層は暗褐色の真砂土を基本土とし、粒状礫を多く含む。B層はにぶい黄褐色の砂礫土を基本土とし、明黄褐色土粒をわずかに含む。C層は褐色のシルト～砂礫質土を基本土とし、炭化物粒を混入する。D層は黄褐色のシルト～砂礫質土を基本土とする。最下層のD3層には炭化物粒が混入



第31图 土坛迹出土遗物 (I)



第32図 土壇跡出土遺物(2)

する。

出土遺物は少量の土器片で、第31図8、9、第32図24はR L単節斜縄文を縦方向に回転させたもので、24は土製円盤である。

第9号土壇跡 (第29図)

調査区南端に位置する。平面形は円形～隅丸方形状を呈す。開口部径1.43m、底面径1.42×1.25m、深さ1.32mで、底面がわずかに西側に寄るが断面形はピーカー状を呈す。底面は平坦である。

埋土はA層、B層、C層、D層、E層に大別される。A層は黄褐色シルト質土を基本土とし、黒褐色土を含む。炭化物粒、焼土粒をわずかに混入し、固くしまる。B層はA層より暗色な黄褐色の砂礫状～シルト質土を基本土とし、暗褐色土を含む。焼土粒を混入し、固くしまる。C層はにぶい黄褐色のシルト質土を基本土とし、C1層はやわらかくしまりがなく、C2層、C3層はやや固くしまる。また、C3層は炭化物粒を混入する。D層はにぶい黄褐色～にぶい黄褐色の砂礫状～シルト質土を基本土とし、黄褐色土を含む。やや固くしまる。E層は明黄褐色～黄褐色土を基本土とする。E1層は粘性があり、しまりがある。E2層、E3層は砂礫状でにぶい黄褐色土を含み、比較的粒が大きめの炭化粒の混入が多い。

出土遺物の量は他の土壇跡に比べて多く、縄文に沈線を施すものが多い。第31図2は体部にR L単節斜縄文を縦方向に回転させた深鉢型土器で、口縁部を折り返す。第32図19は底面に網代痕を施す。10～18、21、22は沈線を施文するもので、10は頸部に沈線をめぐらすもの。14～18は磨消しを伴う平行沈線により曲線的な文様が施されるものである。

第10号土壇跡 (第29図、第30図)

第11号土壇跡に切られるため、平面形や規模は不明である。壁はゆるやかに立ち上がる。埋

土はF層のみで褐色の砂質～シルト質土を基本土とし、淡い黄褐色土粒をわずかに含み、あまりしまりがない。

第11号土壇跡（第29図）

調査区南端部に位置し、第10号土壇跡を切る。平面形は不整な円形を呈し、開口部径1.55×1.36m、底面形1.09×1.00m、深さ1.34mである。断面形はピーカー状を呈する。南東側には深さ約0.45m付近より上に第10号土壇跡の重複が確認されたが、そのほとんどを切るような形で掘り込まれている。底面はやや凹凸が見られるが、ほぼ平坦である。

埋土はA層、B層、C層、D層、E層に大別される。A層は暗褐色シルト質土で、あまりしまりがない。B層は黄褐色～褐色の砂礫土を基本土とし、明黄褐色土の小塊を含む。あまりしまりがない。C層は黒褐色のシルト質土で炭化物粒をわずかに混入する。D層は褐色のシルト質土で明黄褐色土を含む。やわらかくしまりがない。

焼土遺構（第29図、第30図）

調査区南西端部、第11号土壇跡の東側約5mの所に位置する。竪穴等の他の遺構に伴うものではなく、焼土のみがV層上面に確認された。焼土層内から土器片が少量出土しているが、2次焼成により、図示できるものはない。

溝遺構（第33図）

調査区のほぼ中央部をわずかに湾曲して東西に走り、第4号竪穴住居跡を切る。調査区外へと続いたため、その全長等は不明であるが、調査区内での長さは約12m、上幅は西端で1.4m、東端で0.5m、最大幅は約1.6m、深さは検出面から0.22～0.42mである。底部はほぼ平坦である。

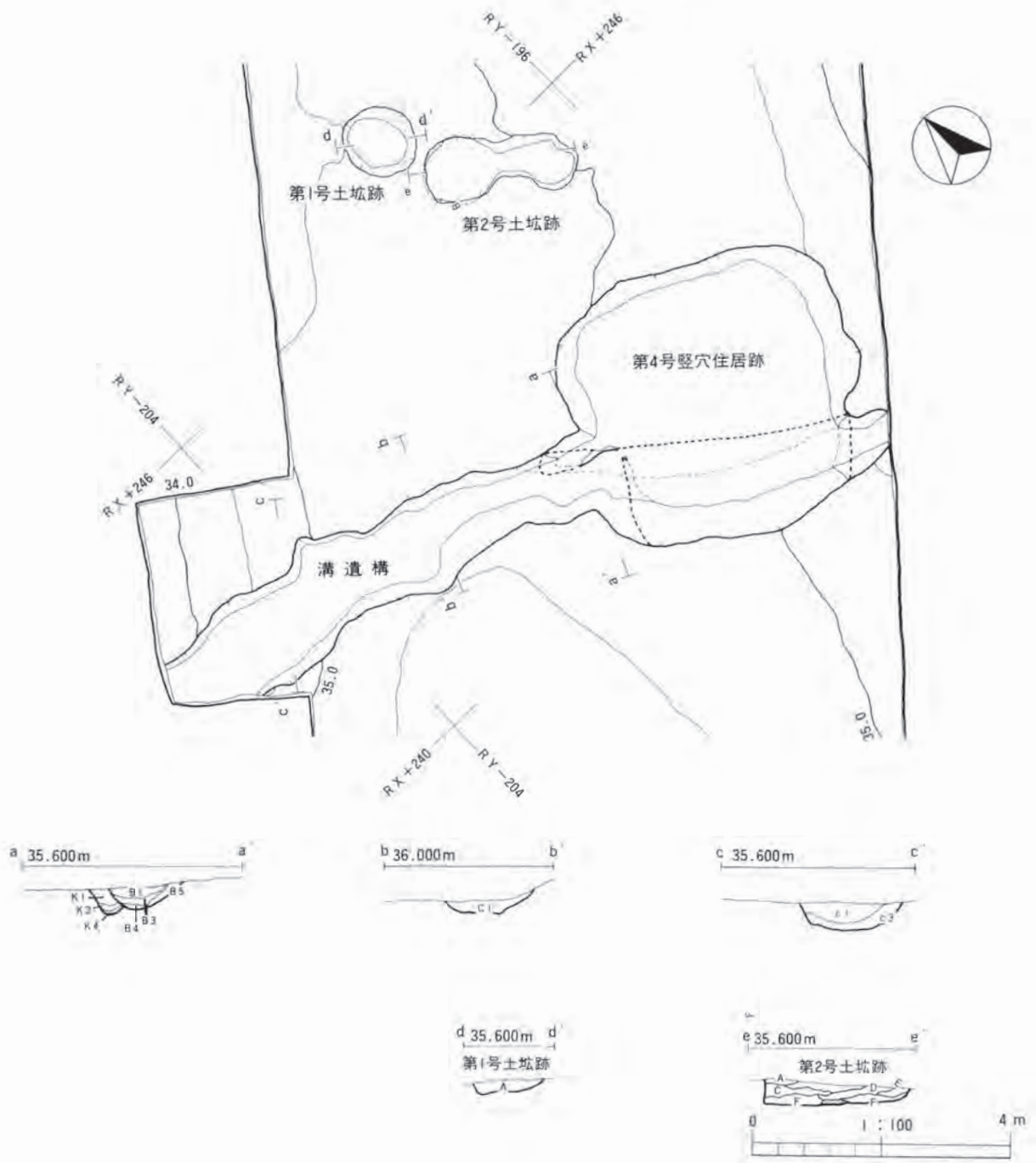
埋土は6層に細分される。暗褐色のシルト～砂礫質土を基本土とし全体に炭化物粒をわずかに含む。B1層、B2層、B3層は黒～黒褐色土の混入が多い。B4層は黄褐色土を混入し最もしまりがある。B5層、B6層は褐色土を混入する。

出土遺物は埋土中より縄文土器片が若干出土しているが、遺構に伴うものではない。

遺構外の出土遺物（第34図、第35図）

表土出土等の遺構外の出土遺物と遺構の埋土中から出土しその遺構に伴うものではない遺物を一括する。

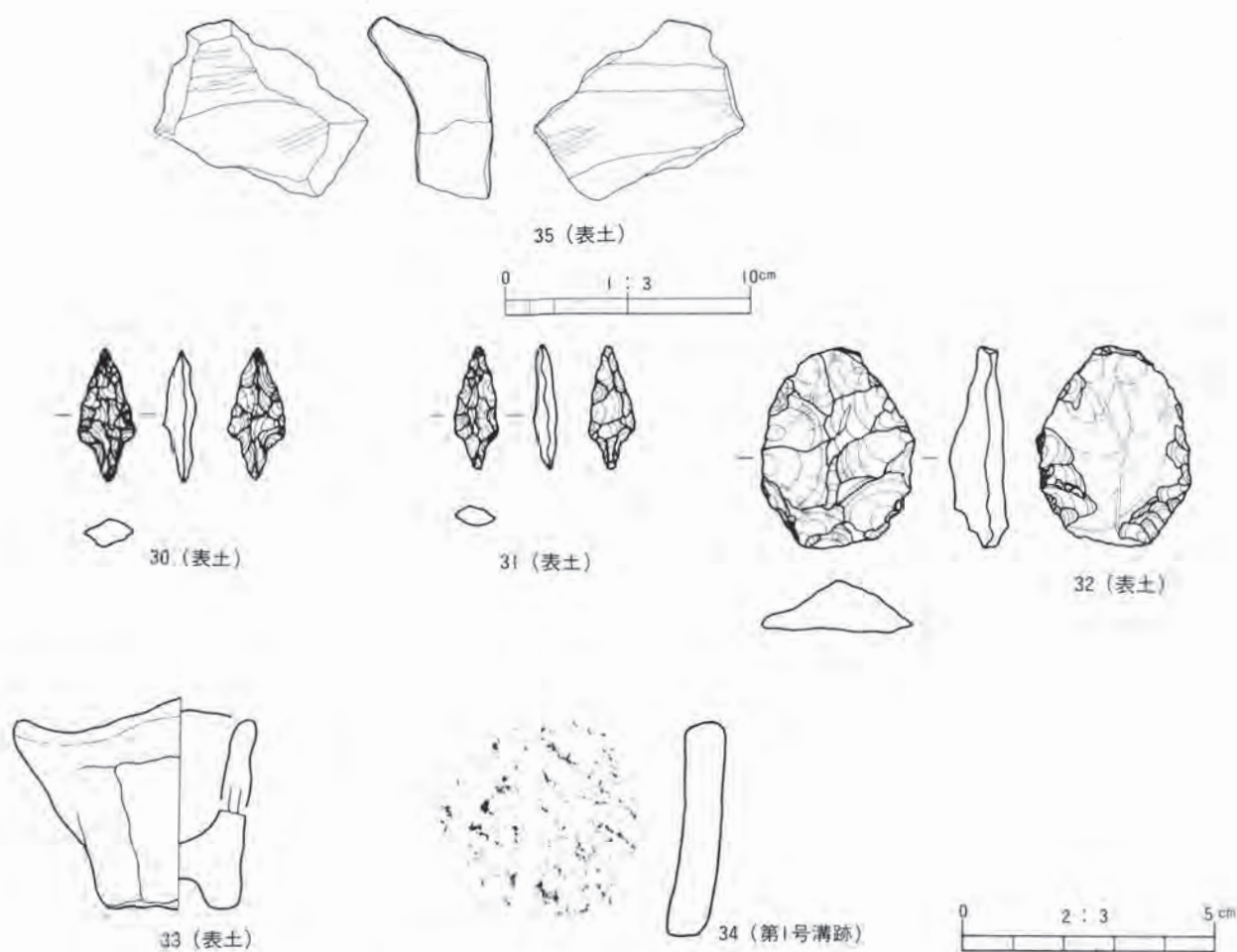
1～3、34は第1号溝遺構埋土出土である。1は底部外面に木葉痕がある。2は口縁部で波状の沈線を施すもので、3は頸部の破片である。34は土製円盤でRL単節斜縄文を縦方向に回転させ、沈線を施す。4～11は第3号竪穴住居跡埋土出土である。4、5、7、8は単節斜縄文に平行沈線を施すもので、縄文は4がRL縦回転、5、7がRL横回転、8がRL縦回転である。6は交互刺突文を施すもの。9、10はRL単節斜縄文を縦方向に回転させたものである。11はRLR複節斜縄文を縦回転させたものと思われる。12～35は表土より出土したものであるが、調査区南端からの出土が多い。12は深鉢の底部で外面に網代痕がある。体部はLR単節斜縄文を縦方向に回転させている。13～23は単節斜縄文の縦回転を施す。27は無文土器の底部である。29は赤焼土環の底部で切り離し後、底面を削っている。（再調整）30、31は有茎の石鉢である。32は両側縁部に細かい剝離を施すもので楕円形を呈す。33はミニチュア土器である。35は石皿、あるいは砥石の破片と思われるものである。34は土製円盤で沈線を施し、周縁をす



第33図 第1号土坑跡・第2号土坑跡・溝遺構



第34図 遺構外出土遺物 (1)



第35図 遺構外出土遺物(2)

IV 調査のまとめ

1. 縄文時代の遺構・遺物について

ピーカー状の土坑跡4基、埋設土器を伴う土坑跡1基などの遺構を検出した。これらの遺構は、調査区の南西部の標高の高い地区に集中する。当遺跡に隣接し昭和62年度に発掘調査を実施した泉町狐崎II遺跡の結果においても、縄文時代の遺構は尾根部でも標高の高い地点に存在しており、標高の低い方に存在する古代期の遺構と立地条件が異なることも考えられる。

時期的には、出土遺物から中期末～後期にかけてのものが主体で第5号土坑跡を除くピーカー状の土坑跡は、すべて後期に所属するもので形態、規模等が類似するものである。

2. 弥生時代の遺構・遺物について

今回の調査で検出した竪穴住居跡は、奈良時代の第5号竪穴住居跡にその大半を切られ詳細は把握しきれなかったが、規模的には長軸8.5m、短軸4.0mをはかる大型の住居跡である。市内では、上村遺跡で5棟の弥生時代の竪穴住居跡を検出したのに次いで2例目となる。上村遺

跡のものに比較すれば、規模の点でははるかに大型となる。このような大型の住居跡は県内においては、滝沢村湯舟沢遺跡などで検出しているが、当遺跡のものは短軸が4.0mと極めて細長い楕円形を呈する点において、他の遺跡のものとは異なる。これは、狭い尾根上に立地するという地形的な制約を受けたものと考えられる。

出土した遺物は、本文中にも記した様に縄文時代晩期最終末～弥生時代初頭期に相当するもの、常盤式に相当するもの、天王山式に相当するもの、赤穴式に相当するもの及びこれらに併行すると考えられる沈線と磨消し技法を伴う土器に分けられる。このうち問題となるのは、最後の沈線と磨消し技法を伴う土器だが、秋田県大岱遺跡、青森県鳥海遺跡、北海道尾白内遺跡などで類似した土器が出土しているが、沈線の太さ、モチーフの在り方などに若干の差異があり、今後の検討を要するものである。

また、今回出土した弥生土器は、全体的に胎土、焼成が良好で脆弱な感じが無い。更に、土器の色調も2つに分かれ、縄文時代晩期最終末～弥生時代最初頭期に相当するものは赤褐色系統、それ以外のものは暗褐色系統で明らかな違いがみられる。

今回のこの第6号竪穴住居跡は、前述土器のどれに伴うものかは判断し兼ねたが、時期が下った方が竪穴の規模も小さくなっていく傾向があることから、古い時期の方に位置づけられるものと考えられる。

3. 奈良時代の遺構・遺物について

竪穴住居跡5棟とそれらに伴う土器・鉄製品・土製紡錘車などの遺物を検出した。

5棟の竪穴住居跡は、幅が約5mと狭い尾根上に各竪穴が重複せず（第5号竪穴住居跡は弥生時代の竪穴住居跡と重複している）、整然と位置しており各竪穴住居跡間の距離も約8m～16mとほぼ一定の間隔となっている。

これらの竪穴住居跡は、形態・規模・構造・埋土の状況など極めて類似している。

- ①形態 方形の平面形を呈する。
- ②規模 一辺が約4.5～6m前後におさまる。
- ③構造 竪穴の主軸方向が尾根の長軸方向と直交する南東方向、カマドの位置も北西側と一致する。また、柱穴配置も各隅に主柱穴を配す4本柱の配置パターンとなっている。
- ④埋土 いずれも竪穴上部を黒色～黒褐色のシルト質土に覆われており、以下の内部の埋土も黄褐色土、黄橙色土の順となり、堆積状態もほぼ類似する。

以上のことに加え出土土器の型式が同一で、しかも1号住と2号住、3号住と4号住から出土した土器が接合しており、同時期あるいは極めて短期間の間に形成された集落跡と考えられる。

次に、個々の竪穴住居跡についてみていくと、特殊な遺構としては、1号住と2号住のカマド右横（北東隅）に構築された段状の遺構が注目される。どちらも明らかに地山を削り出して作っている。床面から0.15～0.3m程高く、平坦面となっている。その使用目的とか、性格などは他に類例を知らないのが全く不明であるが、いずれにしても、特殊な遺構として注目される。

最後に今回の調査で出土した土器群は、その特徴から東北地方南部の国分寺下層式に相当するものである。器種・器形などによりいくつか分類される。

環 口縁部が内湾するA類と外反するB類に分けられ、更に細分される。

- A-1類 口縁部が内湾し体部に段・沈線の認められるもの。
- A-2類 口縁部が内湾し体部に段・沈線の認められないもの。
- B-1類 口縁部が外反し体部に段・沈線の認められるもの。
- B-2類 口縁部が外反し体部に段・沈線の認められないもの。

甕 器形により3類に分けられ、更に頸部に段・沈線の有無により細分される。

- A-1類 長胴形の甕で体部上半に最大径を有し肩部が張り出すもので頸部に明瞭な段・沈線の認められるもの。
- A-2類 器形はA-1類と同じだが、明瞭な段・沈線の認められないもの。
- B-1類 長胴形の甕で体部のほぼ中央付近に最大径を有し、体部がゆるやかにふくらむもので、頸部に明瞭な段・沈線の認められるもの。
- B-2類 器形はB-1類と同じだが、明瞭な段・沈線の認められないもの。
- C-1類 球胴形の甕で、頸部に明瞭な段・沈線の認められるもの。
- C-2類 球胴形の甕で、明瞭な段・沈線の認められないもの。

以上に分類した土器を各住居跡からどれくらい出土しているかを表にしたのが第1表である。

遺構の方で記述したように、5棟の竪穴住居跡は、ほぼ同時期あるいは極めて短期間に形成されたものと考えられることから第1表の示すものは、ひとつの土器型式の中でのセット関係、土器のパラエティーを表すものと考えられる。また、甕のB-1類が各住居跡から出土しており、量的にも多く集中する傾向が見られるようである。甕の底部がA類、B類、C類を問わず外側に張り出すものがほとんどであるということも特徴のひとつとしてあげられる。

今回は、以上の点を指摘するだけにとどめ、今後、沿岸部における類似資料の増加をまわって北上川流域の県中央部、県北部などの他の遺跡との比較・検討などの詳細な分析は今後の課題としたい。

	坏				甕						その他
	A-1類	A-2類	B-1類	B-2類	A-1類	A-2類	B-1類	B-2類	B-1類	C-1類	
1号住					1		2				
2号住		1					1				
3号住						1	1	2		1	
4号住	1		1				1	1			
5号住		1				1	1				

第1表 各住居跡出土土器個体数

IV章の2の執筆に際しては、岩手県埋蔵文化財センター 小田野哲憲氏、岩手県立博物館 熊谷常正氏、佐藤嘉則氏には、直接、出土遺物を見ていただき、数多くのご教授を賜わり、感謝申し上げます。また、IV章の執筆に際しては、以下の文献を参考・引用文献とした。

- 小田野哲憲 「岩手県における弥生時代の住居址」『紀要Ⅲ』(財)岩手県文化財振興事業団埋蔵文化財センター 1988年
- 相原康二 「岩手県南部における古代の土器群編年試案」(岩手県文化財調査報告書第60集)
- 高橋信雄・小田野哲憲・熊谷常正 「岩手の土器」 岩手県立博物館 1982年

写 真 图 版



第 3 号竖穴住居跡遺物出土状況



狐崎遺跡出土土器

第 2 図版



調査区景観（調査前）



調査区全景（調査終了後）



第1号 竖穴住居跡



第1号 竖穴住居跡堆積状況

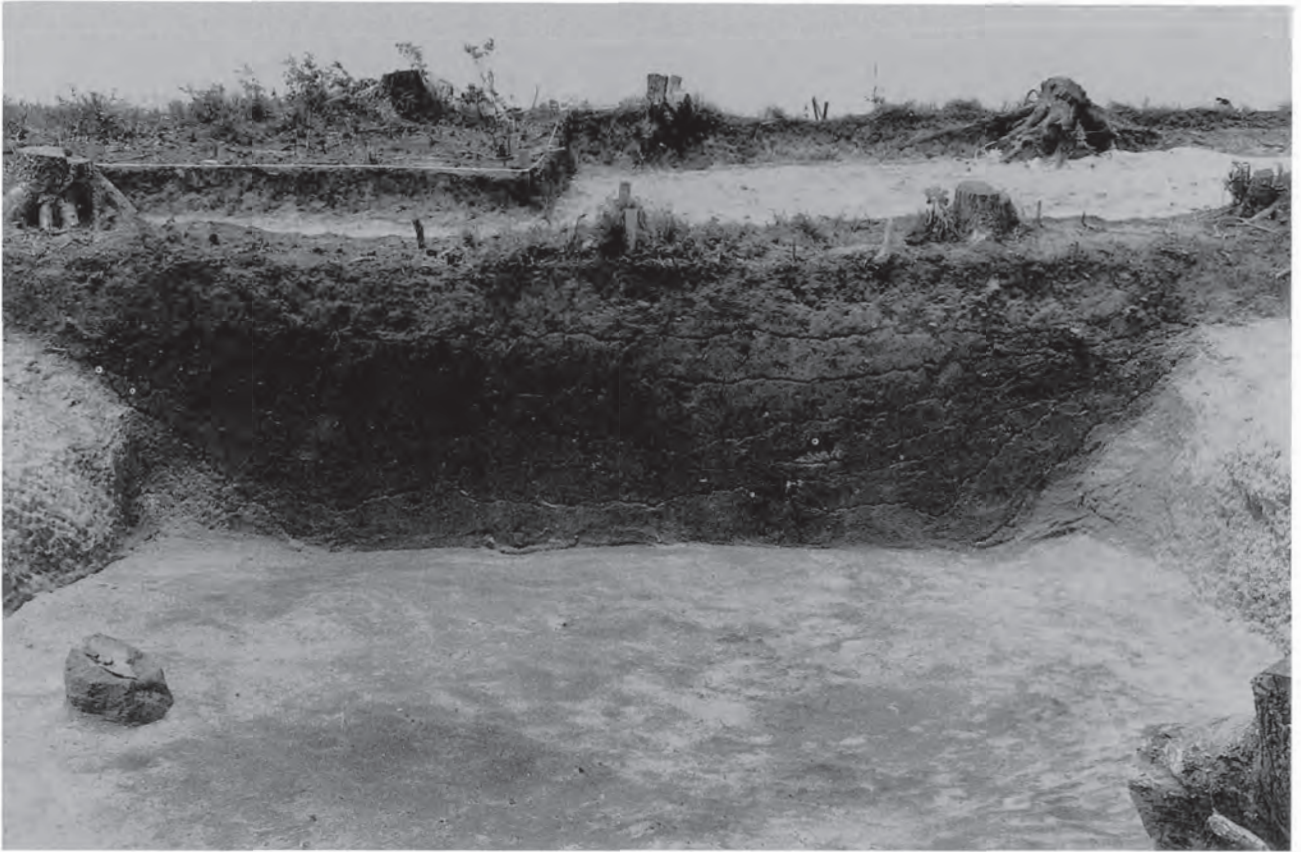
第4図版



第1号竖穴住居跡カマド



第2号竖穴住居跡



第 2 号 豎穴住居跡堆積状況



第 2 号 豎穴住居跡カマド

第 6 図版



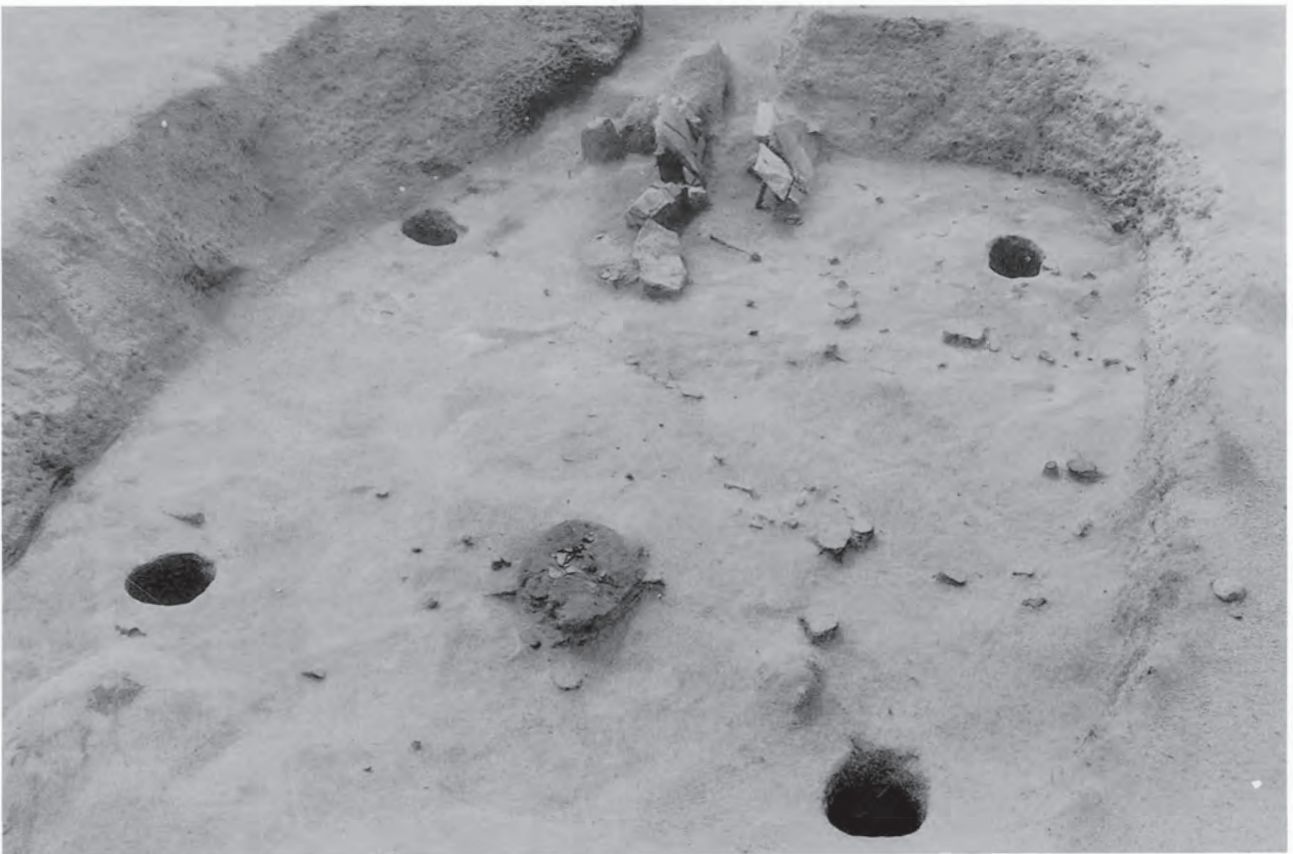
第 3 号 豎 穴 住 居 跡



第 3 号 豎 穴 住 居 跡 堆 積 状 況



第3号竖穴住居跡カマド



第4号竖穴住居跡

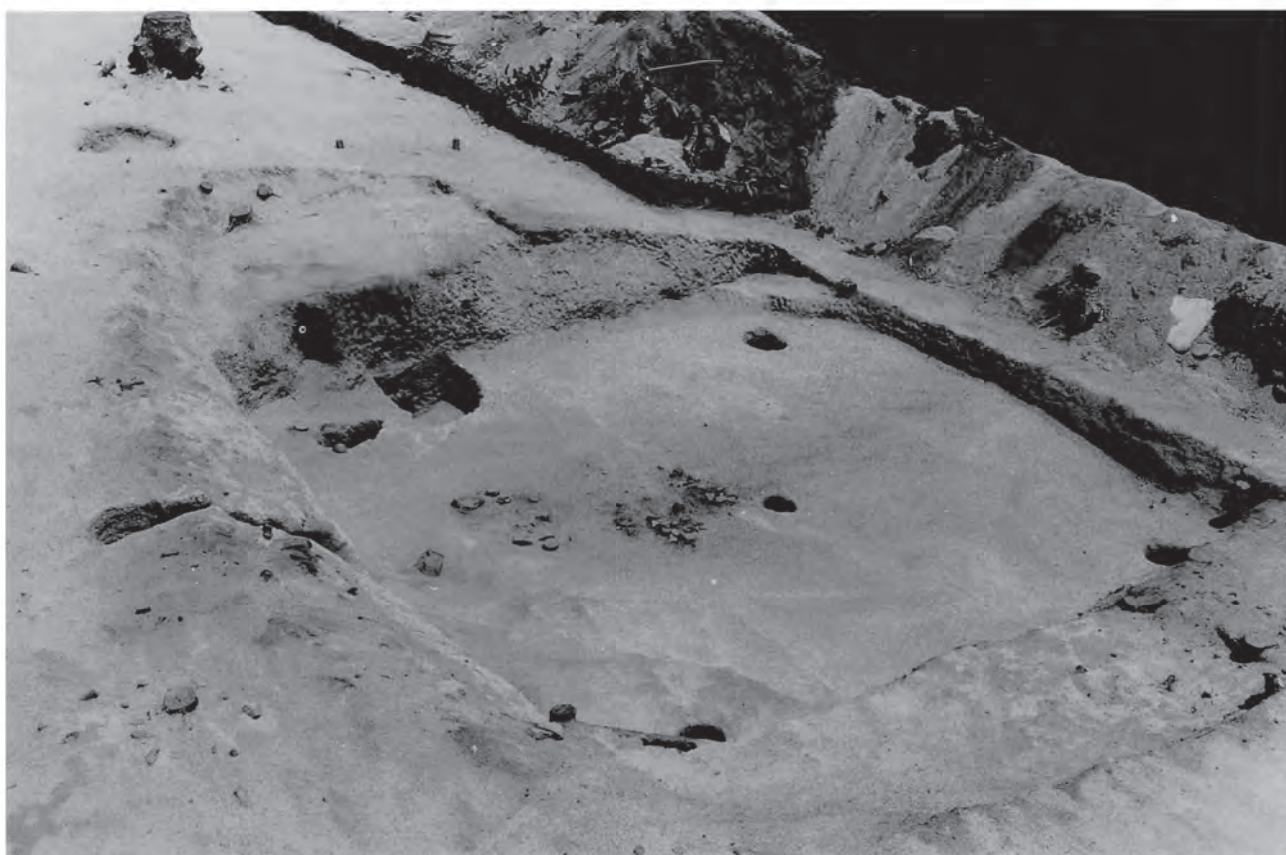
第8図版



第4号竖穴住居跡堆積状況



第4号竖穴住居跡カマド



第5号・第6号竖穴住居跡



第5号・第6号竖穴住居跡堆積状況

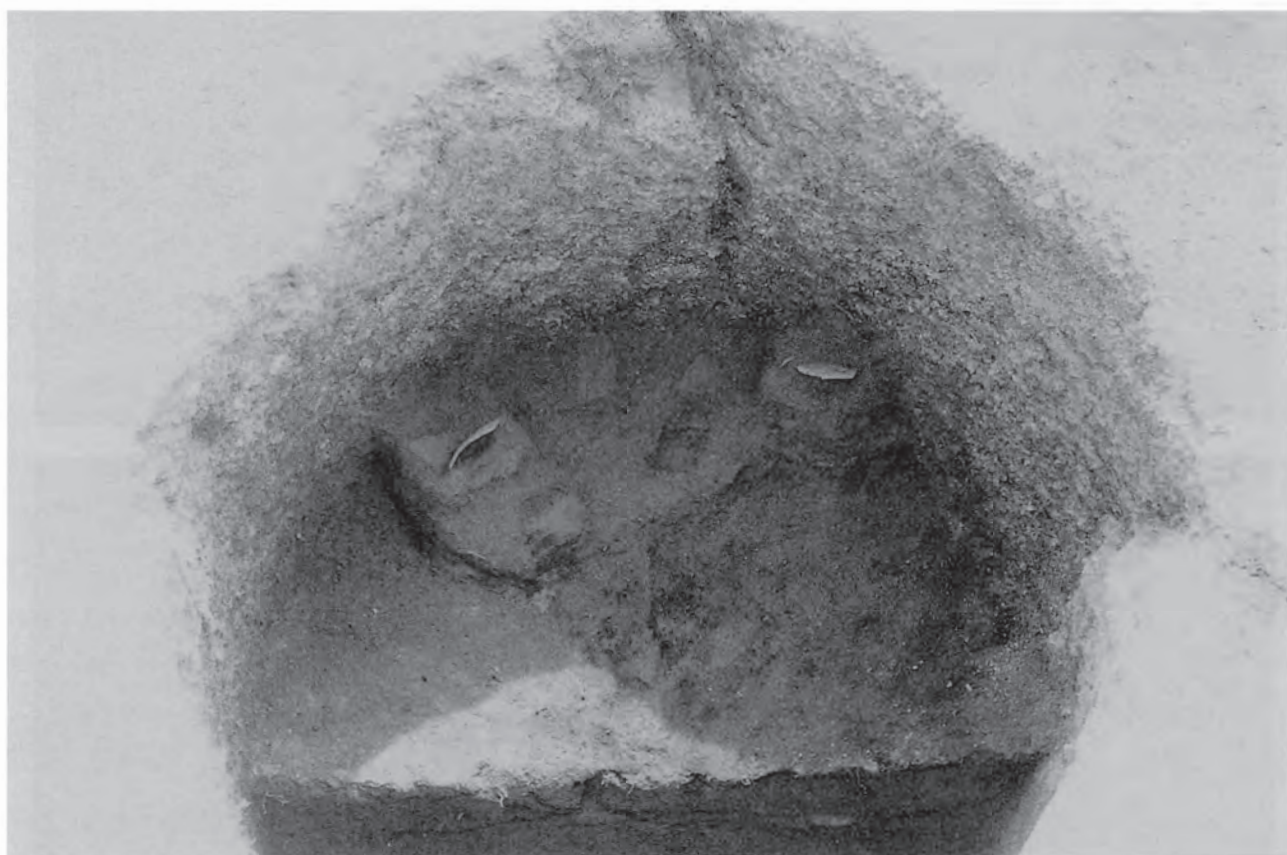
第10図版



第5号竖穴住居跡遺物出土状況



第6号~第9号土壇跡

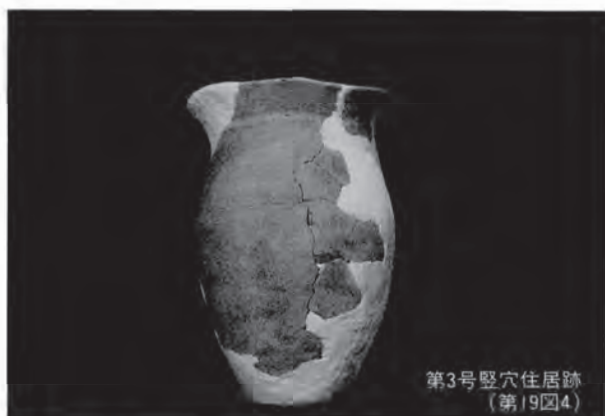
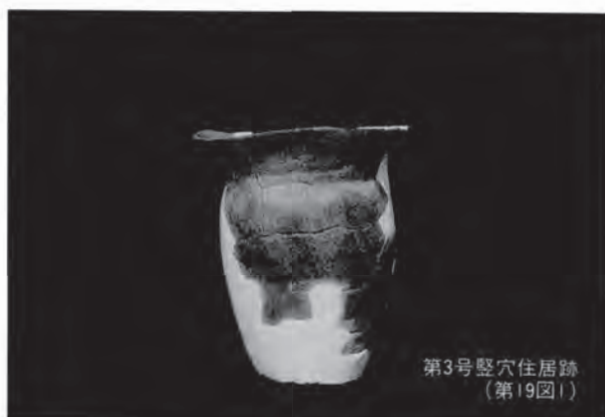
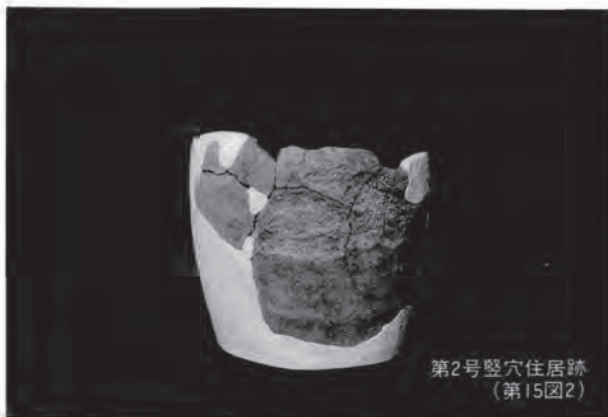
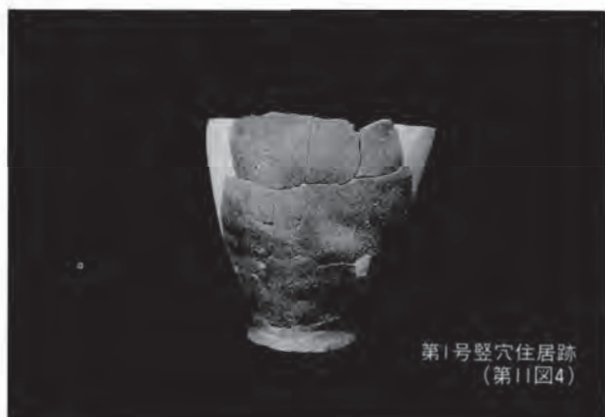
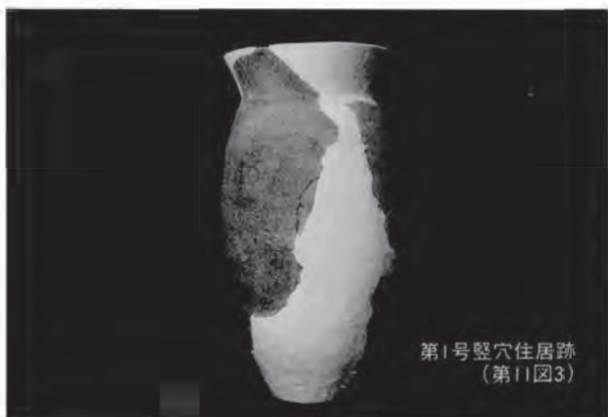
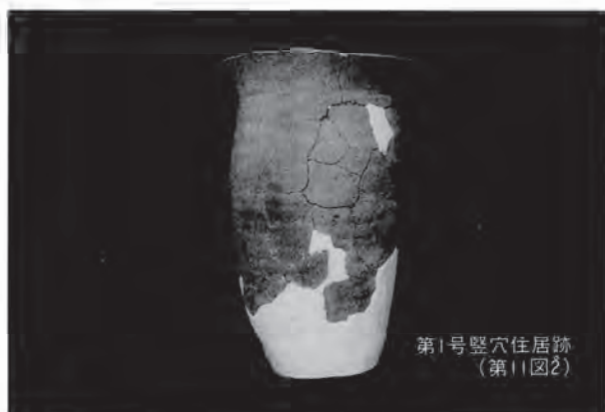
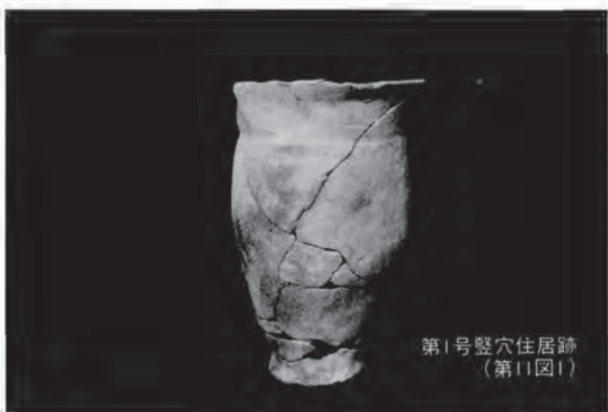


第9号土坛跡遺物出土状況

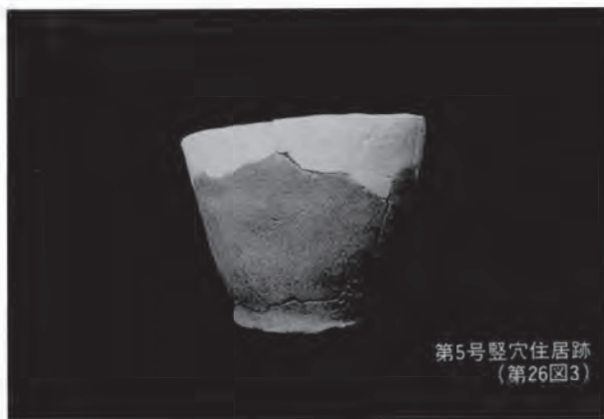
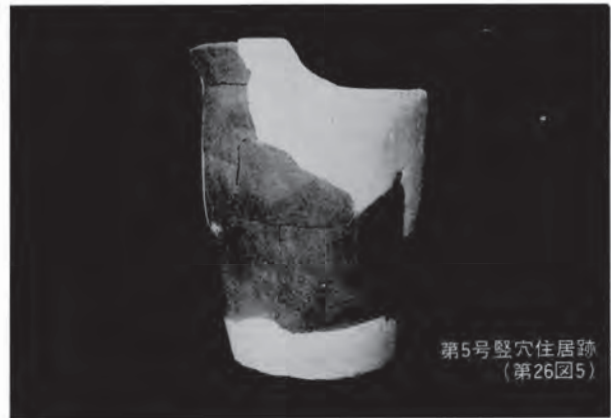
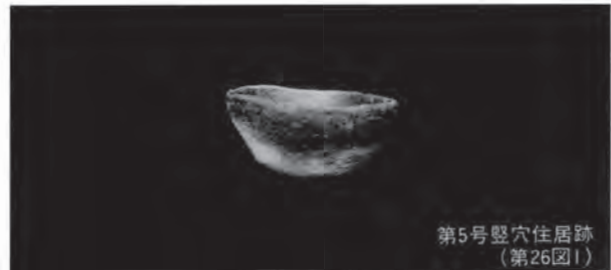
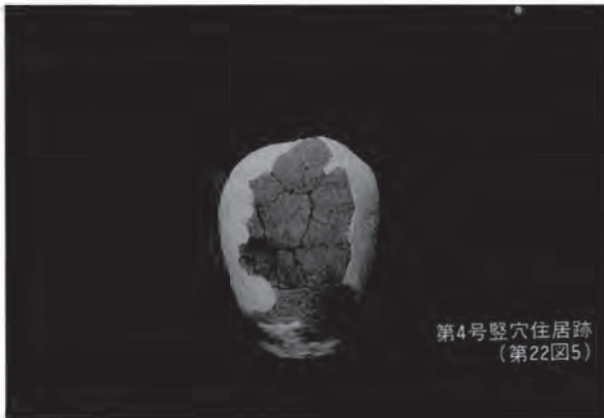
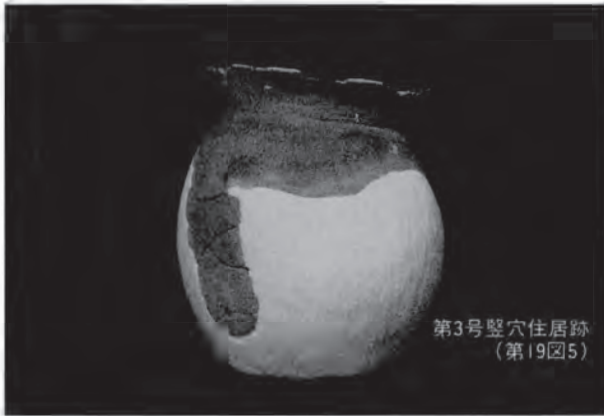


溝遺構

第12図版



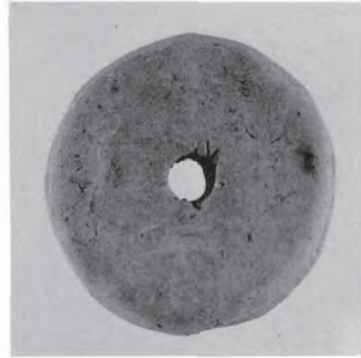
第13図版



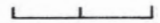
第14図版



第2号竖穴住居跡
(第15図3)



0 1 2 cm



(表)

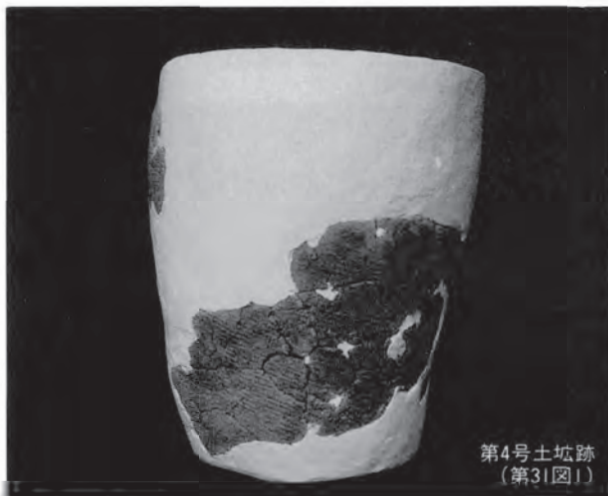


(裏)

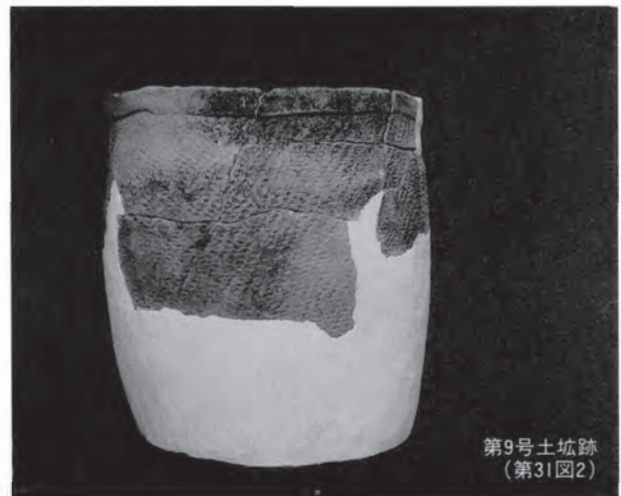


(先端部拡大)

0 5 cm



第4号土坑跡
(第31図1)



第9号土坑跡
(第31図2)

出土遺物(3)

宮古市埋蔵文化財調査報告書22

きつね ぎき
狐 崎 遺 跡

— 平成元年度発掘調査報告書 —

1990.3

発 行 岩手県宮古市教育委員会
宮古市新川町2番1号

印 刷 花坂印刷工業株式会社
岩手県宮古市新川町1番2号